

大阪府 茨木市

平成23年度発掘調査概報

－個人住宅建築に伴う発掘調査報告－

平成24年3月

 茨木市教育委員会

はじめに

私たちが暮らしているこの茨木は、北半分は丹波高原の老の坂山地の麓で、南半分には大阪平野の一部をなす三島平野が広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた過ごしやすい環境の土地として、はるか昔から多くの人たちが生活してきました。そうした人びとの生活は風習として現在に伝えられ、また人びとの生活した足跡は、土に埋もれた文化財として今に残されてきました。

このような先人たちの生活や文化は、現代の私たちの生活の基となるものであり、また、土の中にも残された遺構や遺物は、過去の人びとの生活を知る手がかりとなる貴重な文化遺産として、次代に残し伝えていくべきものであります。

しかし、市内においては、住宅開発をはじめ様々な開発が計画されており、人びとの貴重な文化財を現状のまま残すことが困難になっています。

そのため、文化財を記録して保存し、また出土した遺物や遺構などの資料から古代の人びとの生活像を捉るために、住宅建築をされる方々のご協力をえて、建築に先立ち発掘調査を実施し、文化財の記録保存に努めています。

平成23年度はおもに茨木遺跡、郡遺跡等の調査を実施し、本冊子はそれらの発掘調査について概略を述べたものです。いずれの調査地からも先人達の生活を知るうえで貴重な遺物、遺構が出土しており今後の研究が期待されます。

終わりになりましたが、調査にあたって惜しみないご協力をいただきました関係の皆様に深く感謝するとともに、今後とも本市の埋蔵文化財の保存・保護に一層の温かいご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

平成24年3月31日

茨市教育委員会
教育長 八木 章治

目 次

はじめに

例 言

茨木市内遺跡分布図

平成23年度埋蔵文化財発掘調査一覧表

1. 郡遺跡(上穂積二丁目43-11)	1
2. 総持寺遺跡(三島丘一丁目179-2)	3
3. 上中条遺跡(上中条二丁目35-5)	6
4. 茨木遺跡(片桐町1121-9)	9
5. 中条小学校遺跡(西中条町132-8)	11
6. 中条小学校遺跡(東中条町411-13)	14
7. 茨木遺跡(元町1537-2, 1538-3)	17
8. 耳原遺跡(耳原一丁目277-10)	19
9. 茨木遺跡(片桐町1102-26)	22
10. 東奈良遺跡(天王一丁目17-13)	26
11. 茨木遺跡(別院町1355-2)	28
12. 安威城跡(安威二丁目480-6)	30
13. 郡遺跡(上穂積二丁目584-2)	34
14. 倍賀遺跡(西田中町275-4, 275-5)	38

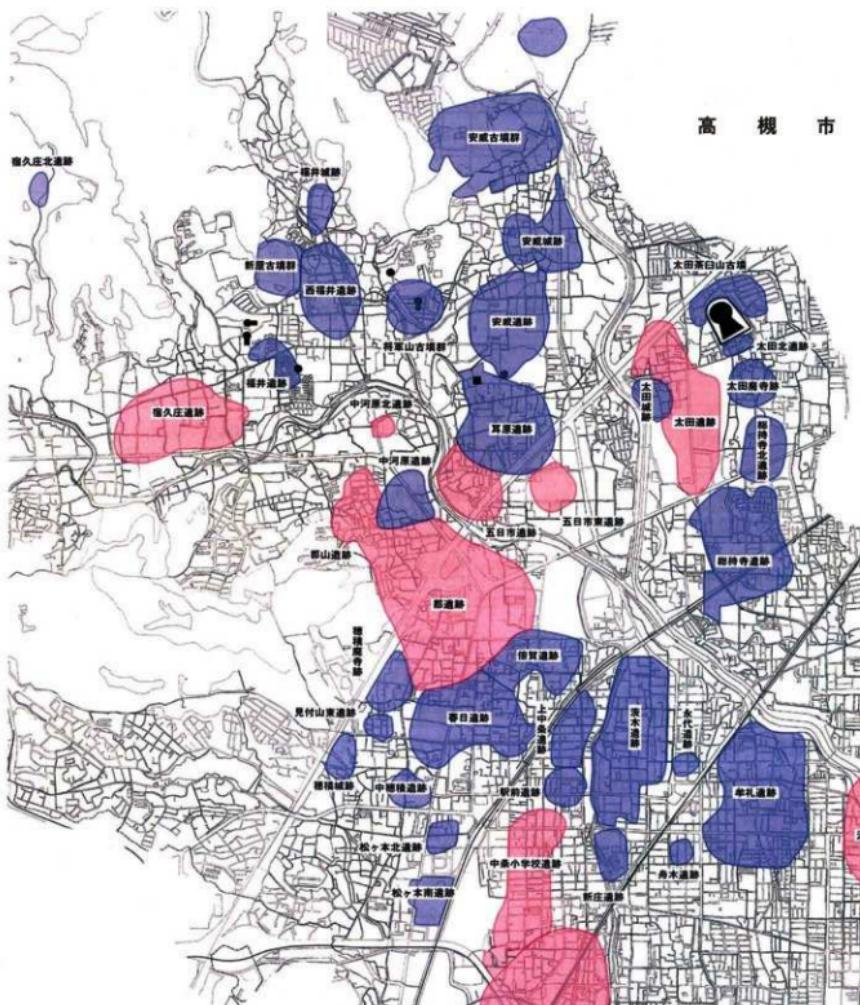
例　　言

- 1 本書は、平成23年度国庫補助事業（総額2,467,150円、国庫50%、市費50%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。
- 2 平成23年度事業として、平成23年4月1日から平成24年3月31までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。
- 3 発掘調査は、調査員 中東正之、宮本賢治、関 梓、富田卓見が担当した。整理・報告書作成業務は、平成24年3月末日まで行った。本書は各調査担当者が執筆を行ない、編集は上田哲平が行なった。整理作業は、高橋公子、堀澤照美、下口法子、西坂泰子、和田恵津子、高瀬隆治、辻本祐布子、北川麻里、初代絵里、清水良真、大坪啓子、松政郁子が行なった。また、国庫補助に関わる事務は、課長兼係長 小田佐衣子、参事（現市民学習課長）池田育生、上田哲平、黒須靖之が担当した。
- 4 本書で使用する標高は、すべてT.P.（東京湾標準海面）で表し、各挿図に掲載した方位表記のうち、M.N.は磁北、Nは真北を示す。また、平面直角座標第IV系に準じる。
- 5 出土遺物及び関係書類・図面・写真等は、茨木市教育委員会・茨木市立文化財資料館〒567-0861大阪府茨木市東奈良三丁目12番18号 TEL072-634-3433で保管している。
- 6 遺構・遺物等の記載は、土層及び遺物の色調については『新版標準土色帖』（小山・竹原編）を使用した。

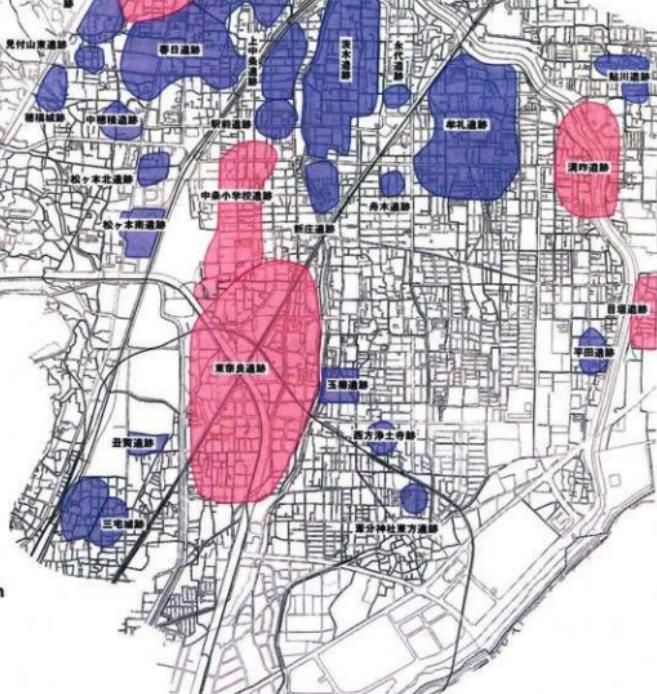
図版目次

第1図	1.都遺跡 調査位置図	P. 1	第43図	7.茨木遺跡 調査区平面・土層断面図	P. 18
第2図	1.都遺跡 調査区配置図	P. 1	第44図	7.茨木遺跡 発掘状況	P. 18
第3図	1.都遺跡 調査区平面・南壁断面図	P. 2	第45図	8.耳原遺跡 調査位置図	P. 19
第4図	1.都遺跡 調査区掘削状況	P. 2	第46図	8.耳原遺跡 調査区配置図	P. 19
第5図	1.都遺跡 南壁断面検出状況	P. 2	第47図	8.耳原遺跡 調査地全景	P. 20
第6図	1.都遺跡 調査地近景	P. 2	第48図	8.耳原遺跡 平面掘削状況	P. 20
第7図	1.都遺跡 調査風景	P. 2	第49図	8.耳原遺跡 調査区平面・断面図	P. 21
第8図	2.総持寺遺跡 調査位置図	P. 3	第50図	9.茨木遺跡 調査位置図	P. 22
第9図	2.総持寺遺跡 調査区配置図	P. 3	第51図	9.茨木遺跡 調査区配置図	P. 22
第10図	2.総持寺遺跡 調査区全景	P. 4	第52図	9.茨木遺跡 調査区平面・断面図	P. 24
第11図	2.総持寺遺跡 平面掘削状況	P. 4	第53図	9.茨木遺跡 調査地全景	P. 25
第12図	2.総持寺遺跡 北壁土層断面	P. 4	第54図	9.茨木遺跡 調査区北部全景	P. 25
第13図	2.総持寺遺跡 作業風景	P. 4	第55図	9.茨木遺跡 調査区北部完掘状況	P. 25
第14図	2.総持寺遺跡 調査区平面・北・東壁土層断面	P. 5	第56図	9.茨木遺跡 調査区西部全景	P. 25
第15図	3.上中条遺跡 調査位置図	P. 6	第57図	9.茨木遺跡 調査区西部完掘状況	P. 25
第16図	3.上中条遺跡 調査区配置図	P. 6	第58図	9.茨木遺跡 調査風景	P. 25
第17図	3.上中条遺跡 道構検出状況	P. 7	第59図	10.東奈良遺跡 調査位置図	P. 26
第18図	3.上中条遺跡 東壁土層断面	P. 7	第60図	10.東奈良遺跡 調査区位置図	P. 26
第19図	3.上中条遺跡		第61図	10.東奈良遺跡 調査区平面・土層断面図	P. 27
	道構平面・調査区北・東壁土層断面図	P. 8	第62図	10.東奈良遺跡 発掘状況	P. 27
第20図	4.茨木遺跡 調査位置図	P. 9	第63図	11.茨木遺跡 調査位置図	P. 28
第21図	4.茨木遺跡 調査区配置図	P. 9	第64図	11.茨木遺跡 調査区位置図	P. 28
第22図	4.茨木遺跡 調査区平面・断面図	P. 10	第65図	11.茨木遺跡 調査区平面・土層断面図	P. 29
第23図	4.茨木遺跡 調査区掘削状況	P. 10	第66図	11.茨木遺跡 発掘状況	P. 29
第24図	4.茨木遺跡 北壁断面検出状況	P. 10	第67図	12.安威城跡 調査位置図	P. 30
第25図	4.茨木遺跡 調査地近景	P. 10	第68図	12.安威城跡 調査区配置図	P. 30
第26図	4.茨木遺跡 調査風景	P. 10	第69図	12.安威城跡 安威城跡推定位置図	P. 32
第27図	5.中条小学校遺跡 調査位置図	P. 11	第70図	12.安威城跡 調査地全景	P. 32
第28図	5.中条小学校遺跡 調査区配置図	P. 11	第71図	12.安威城跡 調査区北部地山完掘状況	P. 32
第29図	5.中条小学校遺跡 調査区掘削状況	P. 12	第72図	12.安威城跡 調査区南部道構面完掘状況	P. 32
第30図	5.中条小学校遺跡 北壁断面検出状況	P. 12	第73図	12.安威城跡 調査風景	P. 32
第31図	5.中条小学校遺跡 調査地近景	P. 12	第74図	12.安威城跡	
第32図	5.中条小学校遺跡 調査風景	P. 12		道構平面図・調査区北・西壁土層断面図	P. 33
第33図	5.中条小学校遺跡		第75図	13.郡遺跡 調査位置図	P. 34
	第1・第2道構面平面図・断面図	P. 13	第76図	13.郡遺跡 調査区配置図	P. 34
第34図	6.中条小学校遺跡 調査位置図	P. 14	第77図	13.郡遺跡 発掘調査風景	P. 35
第35図	6.中条小学校遺跡 調査区配置図	P. 14	第78図	13.郡遺跡 調査区平面図	P. 36
第36図	6.中条小学校遺跡 調査区全景	P. 15	第79図	13.郡遺跡 断面図	P. 37
第37図	6.中条小学校遺跡 道構完掘状況	P. 15	第80図	14.倍賀遺跡 調査位置図	P. 38
第38図	6.中条小学校遺跡 東壁土層断面	P. 15	第81図	14.倍賀遺跡 調査区配置図	P. 38
第39図	6.中条小学校遺跡 調査風景	P. 15	第82図	14.倍賀遺跡 調査区平面・断面図	P. 39
第40図	6.中条小学校遺跡 調査区平面・断面図	P. 16	第83図	14.倍賀遺跡 出土遺物	P. 39
第41図	7.茨木遺跡 調査位置図	P. 17	第84図	14.倍賀遺跡 発掘状況	P. 39
第42図	7.茨木遺跡 調査区配置図	P. 17			

高槻市



吹田市



茨木市内遺跡分布図

0 500 1,000m

平成 23 年度 埋蔵文化財発掘調査 一覧表

No	遺跡名	調査担当	調査位置	調査期間	調査面積	調査内容
1	郡遺跡	中東	上穂積二丁目 43-11	H23.2.3	13.5 m ²	弥生時代
2	慈持寺遺跡	宮本	二鳥丘・丁目 179-2	H23.3.25	8.0 m ²	中世
3	上中条遺跡	宮本	上中条二丁目 35-5	H23.4.27	21.7 m ²	古墳時代～平安 柱穴・土壙・溝・ピット
4	茨木遺跡	中東	片桐町 1121-9	H23.6.2～ H23.6.3	13.0 m ²	近世 耕作溝・ピット
5	中条小学校遺跡	宮本	西中条町 132-8	H23.6.15～ H23.6.16	13.5 m ²	弥生時代 溝・ピット
6	中条小学校遺跡	宮本	東中条町 411-13	H23.7.5～ H23.7.6	28.0 m ²	柱穴・土壙・溝 出土物が摩滅しており 時期不明
7	茨木遺跡	富田	元町 1537-2, 1538-3	H23.7.8	13.5 m ²	近世 遺構の擾乱を確認
8	耳原遺跡	宮本	耳原一丁目 277-10	H23.7.25	8.1 m ²	調査深度盛土内につき、 遺物等出土無し
9	茨木遺跡	宮本	片桐町 1102-26	H23.8.17～ H23.8.18	21.7 m ²	中世～近世
10	東奈良遺跡	富田	天王一丁目 17-13	H23.8.24～ H23.8.26	12.1 m ²	遺構面は検出されず、出土 遺物は客土の可能性が高い
11	茨木遺跡	富田	別院町 1355-2	H23.9.8～ H23.9.9	12.0 m ²	過去の建造物により、遺構の 上層部は破壊。出土遺物は客 土より検出
12	安威城跡	宮本	安威二丁目 480-6	H23.10.19～ H23.10.20	23.8 m ²	遺構面上層より中世～近世の 遺物を検出。構より出土無し 土壙・ピット・集積遺構
13	郡遺跡	岡	上穂積二丁目 584-2	H23.11.24～ H23.11.25	50.0 m ²	中世 卍戸・土壙・ピット
14	倍賀遺跡	富田	西田中町 275-4, 275-5	H23.12.9	6.0 m ²	弥生時代

平成 23 年度の発掘調査のうち、半成 24 年 1 月以降の調査についての報告は「平成 24 年度発掘調査
概報 - 個人住宅建築に伴う発掘調査報告 - 」にて掲載します。

1. 郡遺跡 (KH10-4)

所在地 茨木市上穂積二丁目43-11
開発事業 個人住宅建築工事
調査期間 平成23年2月3日
調査面積 約13.5m²
調査担当 中東 正之
調査結果

経過 郡遺跡は、茨木市中央部の北西に位置し、千里丘陵から派生した扇状地と段丘下位面、茨木川右岸の氾濫平野にかけて広がる、弥生時代から中世の複合遺跡である。規模は、東西約0.7km、南北約1.2kmの範囲が周知されている。調査地は、郡遺跡の南西部、清阪街道と茨木街道の合流点近くに位置する。地形的には、扇状地の扇端部付近の平坦面に該当する。

周辺の既往の調査では、昭和48年度の西幼稚園建設に伴う調査で弥生時代中期の方形周溝墓や土壙群など、昭和55年度の西地区公民館の調査でも弥生時代中期の方形周溝墓や柱穴が検出されている。また、当地の北側に隣接する平成21年度調査地においても、弥生時代と思われる遺構が検出されており、弥生時代の墓域を中心とする遺構面が広がっていることが確認されている。当地では、隣接地において包含層と遺構面が検出されているため発掘調査を実施した。調査は、盛土が緩い状態であることと地山からの湧水があるため、3.4m×4mの調査区とした。

遺構と遺物 現地表面は、標高約19.3mを測る。層序は、上層より第1層 現代盛土、第2層 暗灰色シルト質土(耕土)、第3層 灰色シルト質土(耕土)、第4層 暗オリーブ粘質土(床土)、第5層 暗青灰色粘質土、第6層 黄灰色粘質土(包含層、酸化沈積物降下)、第7層 灰白色粘質土(地山層)となる。標高約17.7mを測る第7層上面を検出面とした。同層からは湧水があり、作業は困難であったが、恒常に地下水位が高い層相は認められなかった。第6層と第7層の層界は、搅乱や澱みがみられ、遺構は検出されなかった。第6層中より弥生土器と思われる土器

片が数点出土したが、摩滅した細片であるため、詳細は不明である。

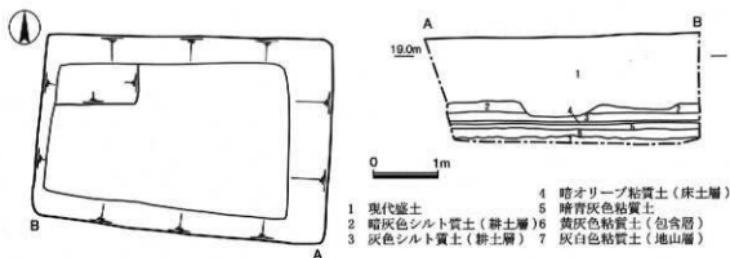
小結 当地においても弥生時代と思われる包含層を確認したが、その層相から二次堆積である可能性がある。地山面も、当地より約20m北に位置する平成21年度調査地の地山面の標高より0.5mほども低い状況であることから、なんらかの土地改変を受けたか、落ち込み等が存在して一時的に湿润な様相を呈していたことが考えられる。



第1図 調査位置図



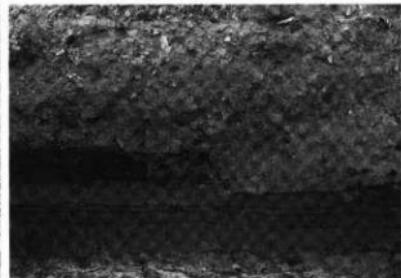
第2図 調査区配置図



第3図 調査区平面・南壁断面図



第4図 調査区掘削状況（東から）



第5図 南壁断面検出状況



第6図 調査地近景（西から）



第7図 調査風景

2. 総持寺遺跡 (SJ10-2)

所在地 茨木市三島丘一丁目179-2

開発事業 個人住宅建築工事

調査期間 平成23年3月25日

調査面積 8m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

経過 総持寺遺跡は、北摂山地から南に派生した下位段丘の富田台地上に立地する弥生時代から中世にかけて営まれた複合集落遺跡である。遺跡の範囲は、三島丘一丁目・二丁目、三島町、総持寺一丁目にかけ、南北に約0.85km、東西に約0.55kmに広がりをみせる。既往の調査では、弥生時代後期頃の円形周溝墓や土器棺墓、古墳時代前期の竪穴住居跡、古墳時代中期の方墳、奈良時代から平安時代の掘立柱建物跡、鎌倉時代の土壙墓や井戸などが検出されている。遺物は、古墳時代中期の円筒埴輪や形象埴輪、糸錘車、鉄刀やガラス製玉、奈良時代から平安時代頃の刻字土器や墨書き土器、縁軸陶器、斎申、鎌倉時代の青磁や瓦器、瓦質土器、硯などがこれまでに出土している。

今回は個人住宅の建設に伴い、事前に発掘調査を実施するに至った。

基本層序 現地表面は、標高約13.6mを測る。今回は建築工事の設計上、掘削可能深度が現地表面下より1.2mまでという制約のもとで調査を行なった。基本層序については、第1層～第3層に大別する事ができる。上層より順に、第

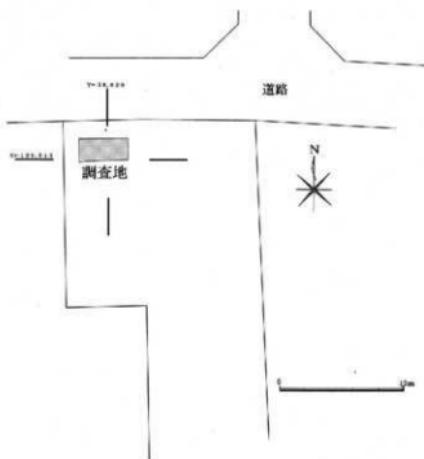
1層、造成盛土層である。層厚は、概ね約0.7mを測る。第2層は、盛土。層厚は、概ね0.1m～0.2mを測る。第3層の土性は、灰色砂質土。層厚は、概ね0.2m～0.3mを測る。

検出遺構・出土遺物 盛土内、自然堆積層内の範疇による事から、遺構や遺物等は確認出来なかった。

まとめ 今回の調査では、掘削可能深度が現地表面下より1.2mまでという制約のもとで調査を行なった為、遺構が存在すると思われる層の確認ができなかった。但し、第3層以下が盛土ではなく自然堆積の土質の様相を示している事から、周辺の調査データからその下層において遺構の広がりを感じさせるものがあった。また、調査区の東に



第8図 調査位置図

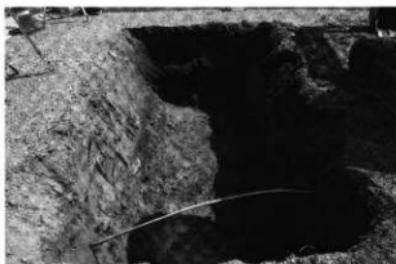


第9図 調査区配置図

は崖線が南北方向に走っている。これは安威川が長い年月をかけ富田台地を削り取った為にできたもので、いわば「はけ」(水が滞留せずに流れる様。崖。)ともいうべきものである。なお、本調査地より北に約160mのところには、もと天照御魂神社の境内社で寛文年間(1661~1662年)に分かれ現在に至る「磯良(いそら)神社」がある。神功皇后がこの社の前から湧き出ている清水で顔を洗うと疣が取れたという伝承から、「疣水(いぼみず)神社」ともいわれている。この崖線の周辺では湧水がみられ、おそらくは当時から水を得やすい環境下にあったものと考えられる。今後の周辺での調査に委ねたい。



第10図 調査区全景(北東から)



第11図 平面掘削状況(西から)



第12図 北壁土層断面

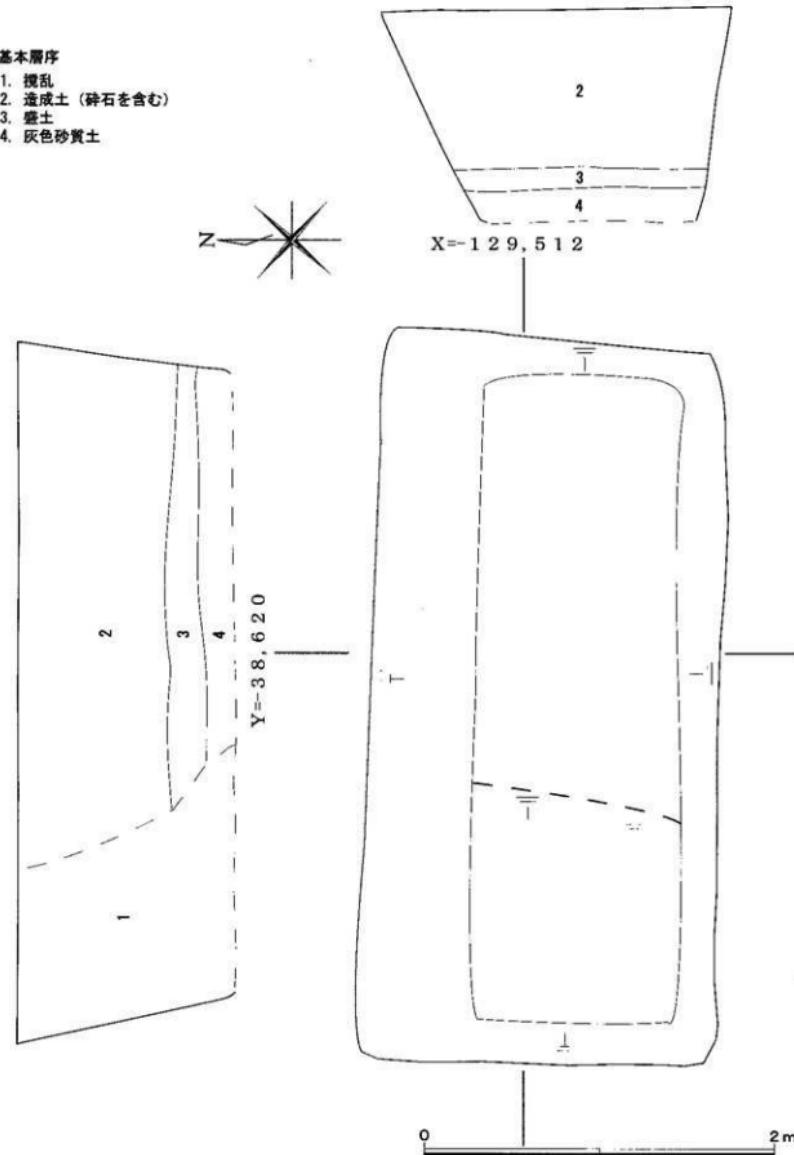


第13図 作業風景(北東から)

14.00m

基本層序

1. 捣乱
2. 造成土（碎石を含む）
3. 硬土
4. 灰色砂質土



第14図 調査区平面・北・東壁土層断面

3. 上中条遺跡 (KC11-1)

所在地 茨木市上中条町二丁目35-5

開発事業 個人住宅建築工事

調査期間 平成23年4月27日

調査面積 21.7m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

経過 上中条遺跡は、上中条一丁目から二丁目にかけて広がる、弥生時代から中世にかけて営まれた複合集落遺跡である。遺跡の範囲は、東西約0.15km×南北約0.4kmに南北に長く広がりをみせる。



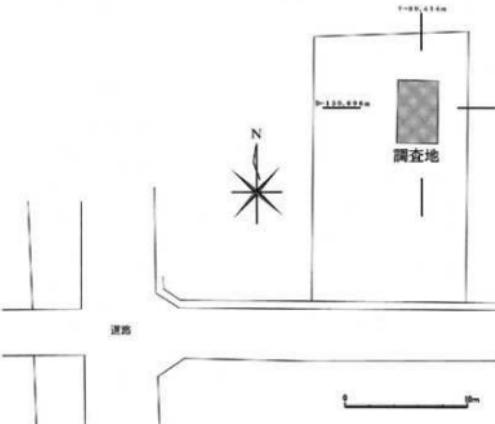
第15図 調査位置図

既往の調査事例では、平成6年度のマンション建設に伴い事前に調査が行なわれ、その際に古墳時代前期初頭頃の方形周溝墓や掘立柱建物跡が検出された。直近の平成22年度の調査では、方墳の周溝の可能性のある遺構が検出された。出土遺物は、5世紀末頃のものと思われる土師器丸底壺や6世紀前後のものと考えられる須恵器小型壺、この他には朝顔型埴輪の口縁下部と考えられる埴輪が出土した。今回は個人住宅の建設に伴い、事前に発掘調査を実施するに至った。

基本層序 現地表面は、標高約12.1mを測る。基本層序については、第1層～第7層に大別する事ができる。上層より順に、第1層、現代の盛土層である。層厚は、約0.55mを測る。第2層の土性は、青灰色砂質土。層厚は、概ね0.1m～0.2mを測る。第3層の土性は、青灰色粘性シルト。層厚は概ね0.2m～0.25mを測る。第4層の土性は灰色粘土で、層厚は概ね0.15m～0.3mを測る。第5層の土性は、黄灰色砂質土で、層厚は概ね0.05m～0.1mを測る。第6層の土性は灰褐色土で、層厚は概ね0.05m～0.1mを測る。

第7層の土性は、黄色粘土～砂礫の地山層となる。総括すると、調査区域は幾度かに渡り元茨木川の氾濫を受けていたものと思われ、洪水堆積を示す様相（第2、5、7層）がみられた。また、地山を削平して流れ込んだと考えられる黄色砂礫の堆積が調査区の東側において顕著にみられた。

検出遺構 検出された遺構としては、柱穴遺構1基、ピット状遺構6基、溝遺構1条、土壙遺構2基、不明遺構1基が挙げられる。なお、東西方向に走る溝状遺構については、西隣りで実施された平成4年



第16図 調査区配置図

度調査時に検出された溝状遺構に繋がる可能性が高いものと思われる。

出土遺物 今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド（縦14cm×横36cm×奥行き56cm）に換算して1箱分である。その種類と内訳は、須恵器、土師器などの遺物が出土している。

まとめ 今回の調査では、古墳時代以降の生活面の様相の一端を垣間みる事が出来た。周辺の既往調査で検出されている弥生時代後期頃～古墳時代後期頃の墓域の推定地となるような遺物、遺構は検出されなかった。今後の調査に期待したい。

参考文献

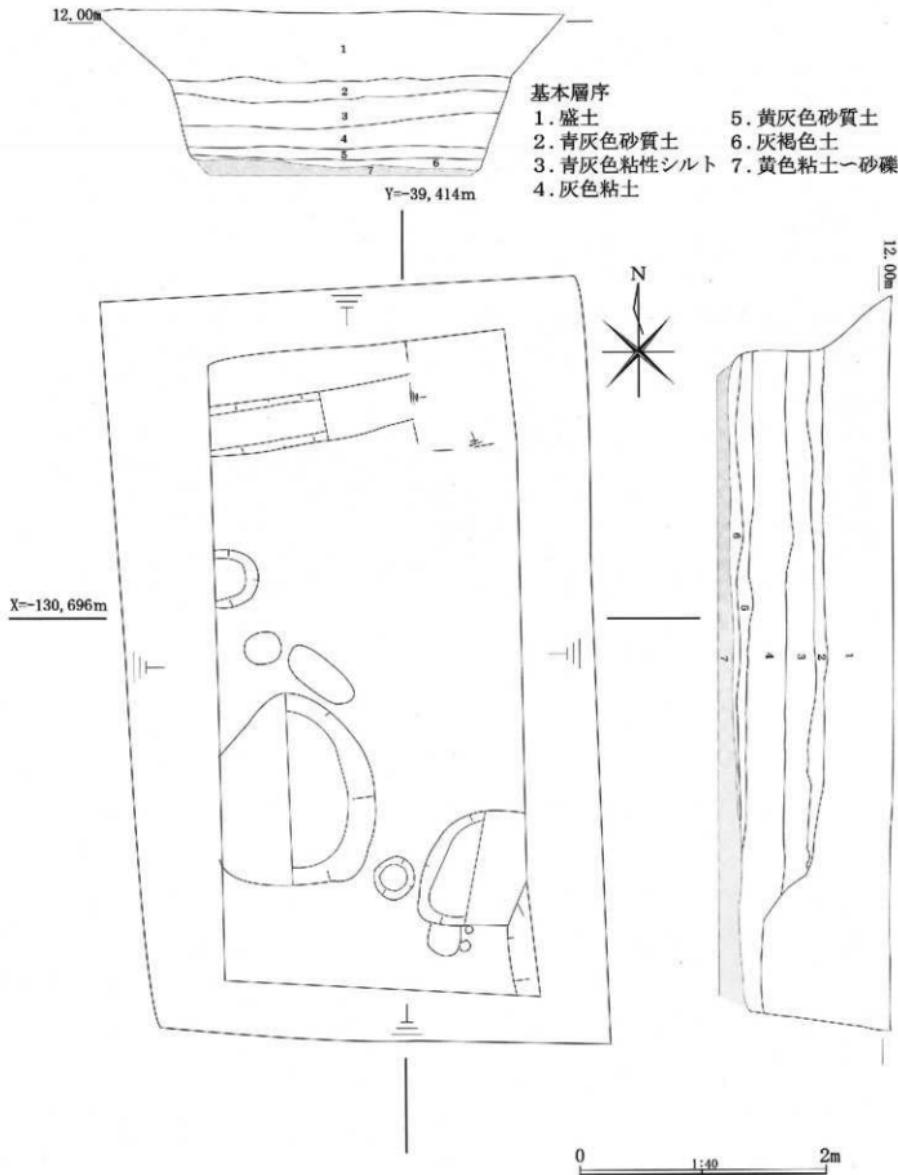
『平成22年度発掘調査概報』平成22年3月 茨木市教育委員会



第17図 遺構検出状況（北から）



第18図 東壁土層断面



第19図 透構平面、調査区北・東壁土層断面図

4. 茨木遺跡 (IK11-1)

所在地 茨木市片桐町1121-9

調査原因 個人住宅建築工事

調査期間 平成22年4月26日

調査面積 約13m²

調査担当 中東 正之

調査結果

経過 茨木遺跡は、元茨木川と安威川に挟まれた氾濫平野（盛土地）に立地している。この地域での人間活動の痕跡は古墳時代に遡るが、元茨木川沿いの茨木城を中心とした中世城下町として本格的に集落が成立したと考えられる。廃城後も地域の商業の中心として近世町場が発達し、現在もいわゆる在郷町の景観を多く残す地域である。その範囲は、北から上泉町・東宮町・片桐町・本町・宮元町・元町・大手町にかけての、南北に約1km、東西約0.45kmが周知されている。発掘調査は平成2年度より実施されているが、遺跡の南側を中心とする近年の再開発によって、ようやくその全容が明らかとなりつつある。平成8年度の大手町の調査では、茨木城総構えの一部ではないかとされる堀などが検出されている。平成18年度の本町の調査では、茨木城東堀と推定される位置において、流路から格式の高い一括建具が出土するなど、茨木城に直接関係するとみられる遺構・遺物が検出され、注目されている。本調査地は、茨木小学校の北側の住宅が密集する地区である。当地は、旧小字名で「中土井」と「本丸」の境界付近に位置し、城郭中心部推定範囲に該当する。当地区は、廃城後は空閑地となり、村の共有地として田畠などに利用されていたと伝えられている。当地の北側には、その名残と思われる空き地が現在も残る。今回、個人住宅の建替えに伴い発掘調査を実施した。当地は通学路に面しているため、安全面から、敷地奥に3.2m×4mの調査区を設定した。

遺構・遺物 現地表面は標高11.15mを測る。層序は、上層より第1層 現代盛土、第2層 黄褐色土と灰色土の混土（近・現代層）、第3層 暗灰色粘質シルト（耕土）、第4層 灰色砂質土（耕土）、第5層 明黄褐色粘質土、第6層 灰白色砂質土、第7層 灰色粘土、第8層 青灰色粘土となる。遺構検出は、第5層上面で実施した。検出面は標高約10.5mを測る。検出遺構は、近世の溝、掘込み、ピットである。

溝は、幅0.3m程度、深さ0.1mを測る耕作溝であると思われる。掘込みは、調査区外に至るために全容は不明である。完堀せずに、北壁沿いで断面観察のみを実施した。深さは0.4m程度を測る。ともに埋土内から近世の国産陶器片な



第20図 調査位置図

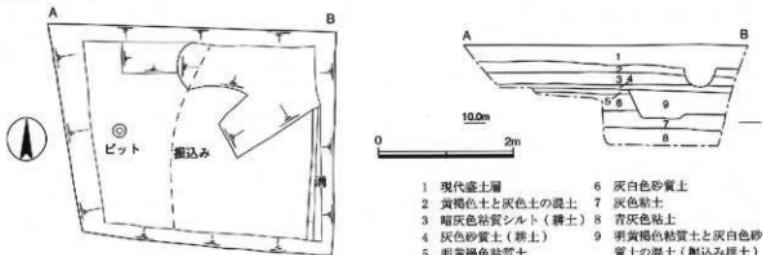


第21図 調査区配置図

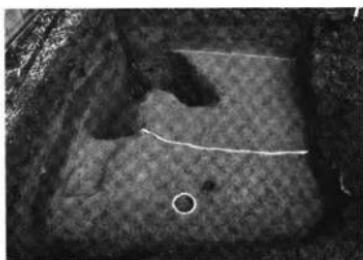
どが出土した。ピットは、径0.2m、深さ0.07mを測る。

まとめ 今回の調査では、城郭に関するものを確認することはできなかった。宅地化する以前は、長らく農地であったと判断される。掘込みの存在から、農地となる以前に何らかの土地利用がなされていたと考えられるが、城郭存続期に遡るものではないと思われる。

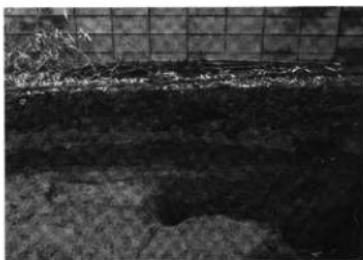
茨木城は、元茨木川を外堀に見立てて築城されたため、城郭部は、川沿いの低地部に構えていた。徹底的に破却され、平低地に戻されたため、その姿は、旧字名とその字界や、茨木神社の東門(伝搦手門)など茨木城から移築されたと伝えられるいくつかの遺構から垣間みられるのみである。しかし、平成18年度調査の出土建具の例を破城の一例とみれば、同様に城郭に由来する遺物が、潤湿さのために良好な状態で埋もれている可能性が考えられる。今後の発掘調査の成果に期待したい。



第22図 調査区平面・断面図



第23図 調査区掘削状況（西から）



第24図 北壁断面検出状況



第25図 調査地近景（南西から）



第26図 調査風景（北から）

5. 中条小学校遺跡 (CJ11-1)

所在地 茨木市西中条町132-8

開発事業 個人住宅建築工事

調査期間 平成23年6月15日～16日

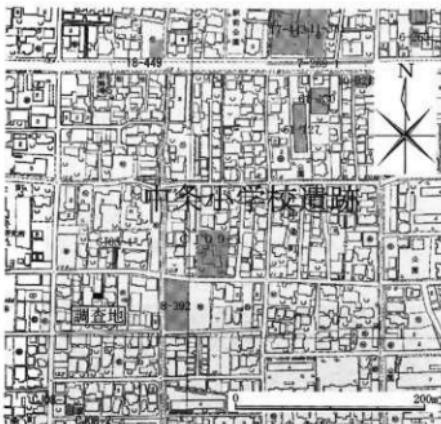
調査面積 8m²

調査担当 宮本 賢治

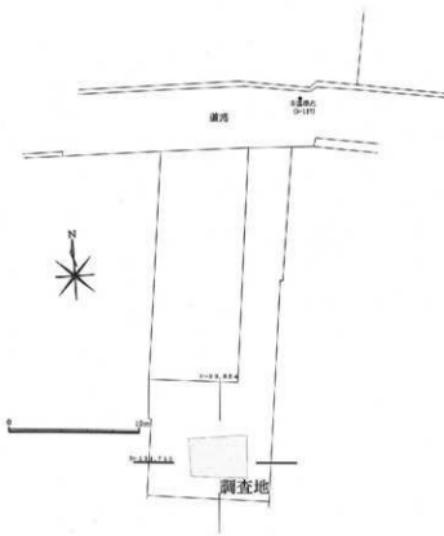
調査結果

経過 中条小学校遺跡は、新中条町にある中条小学校を中心に、南北約0.8km×東西に約0.4kmの西中条町・下中条町・小川町にかけて南北に長細く広がる、弥生時代中期から中世にかけて継続的に営まれた複合的な集落遺跡である。今回の調査地は中条小学校遺跡のほぼ中央の西限に位置する。その南方に位置する東奈良遺跡は、弥生時代前期から中・近世頃にかけての集落跡で、近年には弥生時代中期後半頃の環濠の底から小銅鐸が発見された。また、北方には弥生時代中期後半か古墳時代後期にかけての住居跡がみられる駅前遺跡が存在する。中条小学校遺跡の既往調査では、古墳時代中期頃の掘立柱建物跡を中心とした住居跡や円墳といった群集墳などの古墳が多く見られる。

基本層序 現地表面は、標高約12.5mを測る。基本層序については、第1層～第7層に大別する事ができる。上層より順に、第1層、現代の盛土層である。層厚は、概ね約0.65mを測る。第2層は、旧耕土である。層厚は概ね0.2mを測るが、部分的に後世の削平を受けていた。第3層の土性は、灰褐色粘土に灰色微砂が混じる。層厚は概ね0.1mを測り、炭化物や摩滅した土器片などが含まれる。第4層の土性は、にぶい褐色粘質土に黄灰色砂質土が混じる。層厚は概ね0.1mと堆積が希薄で、炭化物や摩滅した土器片などが含まれる。第5層の土性は、青灰色シルトに黄褐色砂質土が混じる。層厚は概ね0.15mを測り、土器片が含まれる。第6層の土性は、灰色砂ににぶい黄色砂質土ブロックを含む層である。層厚は概ね0.15m～0.3mを測り、洪水堆積または



第27図 調査位置図



第28図 調査区配置図

河道堆積の可能性が考えられる。第7層の土性は黄色砂に灰色微砂が混じり、地山となる。

検出遺構 第1遺構面である中世頃の生活面では、ピット状遺構5基、柱穴遺構7基、溝状遺構2条、土壙遺構1基を検出した。最終面である第2遺構面では遺構やそれに伴う遺物は検出・出土せず、時期は不明である。

出土遺物 今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド(縦14cm×横36cm×奥行き56cm)に換算して1箱分である。その種類と内訳は、中世頃の陶磁器や古墳時代の須恵器、土師器などの遺物が出土している。

まとめ 第1遺構面である中世頃の生活面では、集落を構成するうえで必要な各遺構が検出された。第2遺構面では黄色砂に灰色微砂が混じる地山となり、洪水堆積を思わせるような層が検出された。今後は既往の調査と照らし合わせて、中条小学校遺跡の集落の歴史的背景を検討してあきらかにしていきたい。



第29図 調査区掘削状況（西から）



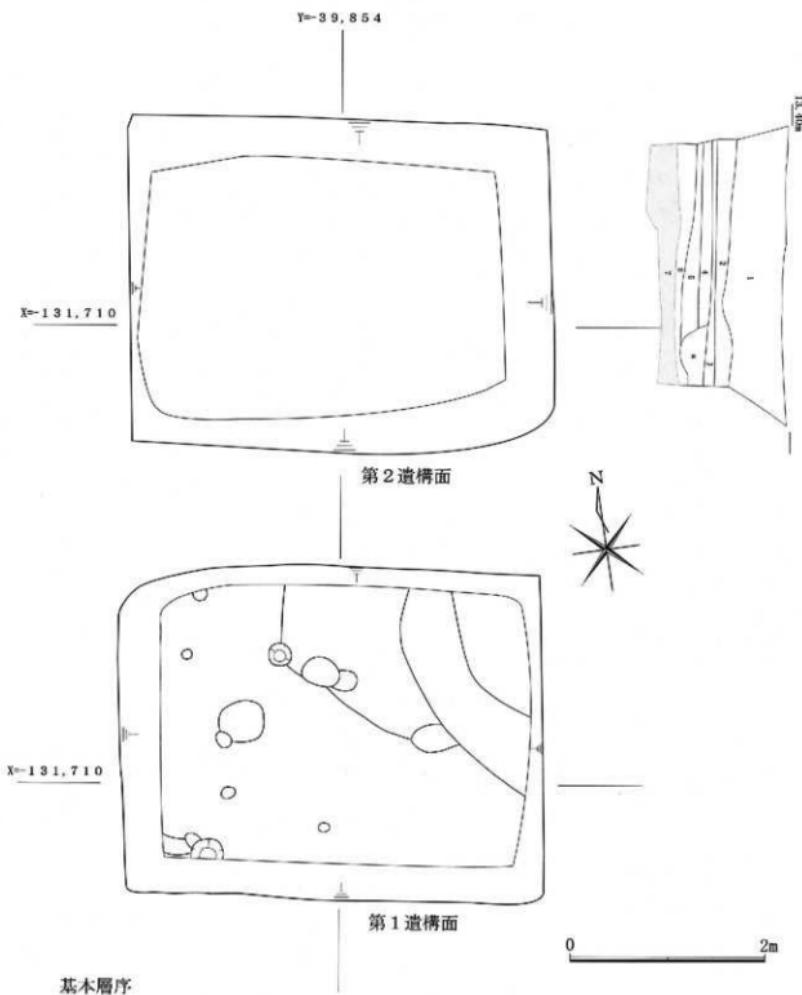
第30図 北壁断面検出状況



第31図 調査地近景（南西から）



第32図 調査風景（北から）



基本層序

1. 盛土
2. 旧耕土
3. 灰褐色粘土に灰色微砂混じる。※土器片、炭化物を含む。
4. にぶい褐色粘質土に黄灰色砂質土混じる。
5. 青灰色シルトに黄褐色砂質土混じる。
6. 灰色砂ににぶい黄色砂質土ブロック含む。
7. 黄色砂に灰色微砂混じる。
 - a. 暗褐色粘土ににぶい橙色粘質土混じる。

第33図 第1・第2造構面平面図、断面図

6. 中条小学校遺跡 (CJ11-2)

所在地 茨木市東中条町411-13

開発事業 個人住宅建築工事

調査期間 平成23年7月5日～6日

調査面積 約28m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

経過 中条小学校遺跡は、新中条町にある中条小学校を中心、南北約0.8km×東西に約0.4kmの西中条町・下中条町・小川町にかけて南北に長細く広がる、弥生時代中期から中世にかけて継続的に営まれた複合的な集落遺跡である。今回の調査地は、中条小学校遺跡の包蔵地のほぼ東限に位置する。その南方に位置する東奈良遺跡は、弥生時代前期から中・近世頃にかけての集落跡で、近年には弥生時代中期後半頃の環濠の底から小銅鐸が発見された。また、北方には弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての住居跡がみられる駅前遺跡が存在する。中条小学校遺跡の既往の調査では、古墳時代中期頃の掘立柱建物跡を中心とした住居跡や円墳といった群集墳などの古墳が多く見られる。今回の調査では、主に弥生時代後期から古墳時代と中世頃の生活面を調査の対象とした。

基本層序 現地表面は、標高約10.5mを測る。基本層序については、第1層～第6層に大別することができる。上層より第1層、現代の盛土層である。層厚は、概ね約0.35m～0.55mを測る。第2層は旧耕土である。層厚は、概ね0.2mを測る。第3層は黄灰色砂質土の土性を持ち、層厚は概ね0.15mを測る。第4層は灰褐色砂質土の土性を持ち、層厚は概ね0.05m～0.15mと堆積の厚みにややばらつきが見られ、希薄な箇所は後世の削平があったものと思われる。第5層は、灰色粘質土の土色を持ち、層厚は概ね0.2mを測る。第6層は、明黄褐色砂質土に一部暗灰色粘土をブロック状で含む地山となる。

検出遺構 今回の調査では

ピット状遺構8基、柱穴遺構7

基、土壤遺構1基を検出した。

なお、遺構からは遺物がほとんど

出土していないため、時期は

不明である。

出土遺物 今回の調査において

出土した遺物の量は、遺物収

納用コンテナパッド(縦14cm×

横36cm×奥行き56cm)に換算し

て1箱分である。その種類と内



第34図 調査位置図



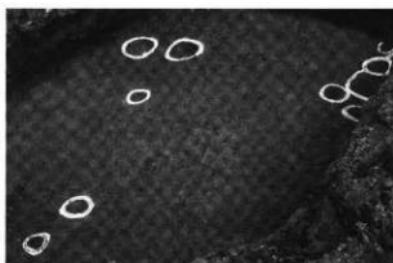
第35図 調査区配置図

訳は、調査区東壁土層断面中より、細片のため詳細は分からぬが、内面内黒の特徴を持つ黒色土器A類が出土している。また同区土層断面中より、6世紀半ば頃のものと思われる須恵器壺の体部の破片が出土している。ほかに調査区東壁土層断面盛土中より、「寛永通宝」(寛永13年:1636年~幕末まで鋳造)が1点出土している。

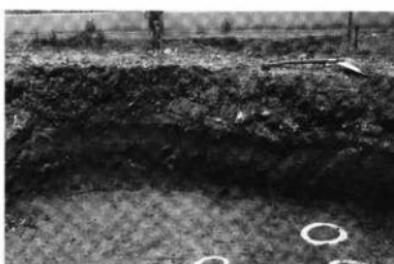
まとめ 既往の調査として、調査区から北東約10mのところにあるハローワーク建設に伴う発掘調査が行われており、東西方向や南北方向に走る溝が検出され、一部の溝からは古墳時代後期頃の須恵器片が出土している。今回の調査で検出された遺構との関連性が伺えるとの見方もある。今後は既往の調査と照らし合わせて、中条小学校遺跡の集落の歴史的背景を検討してあきらかにしていきたい。



第36図 調査区全景（北西から）



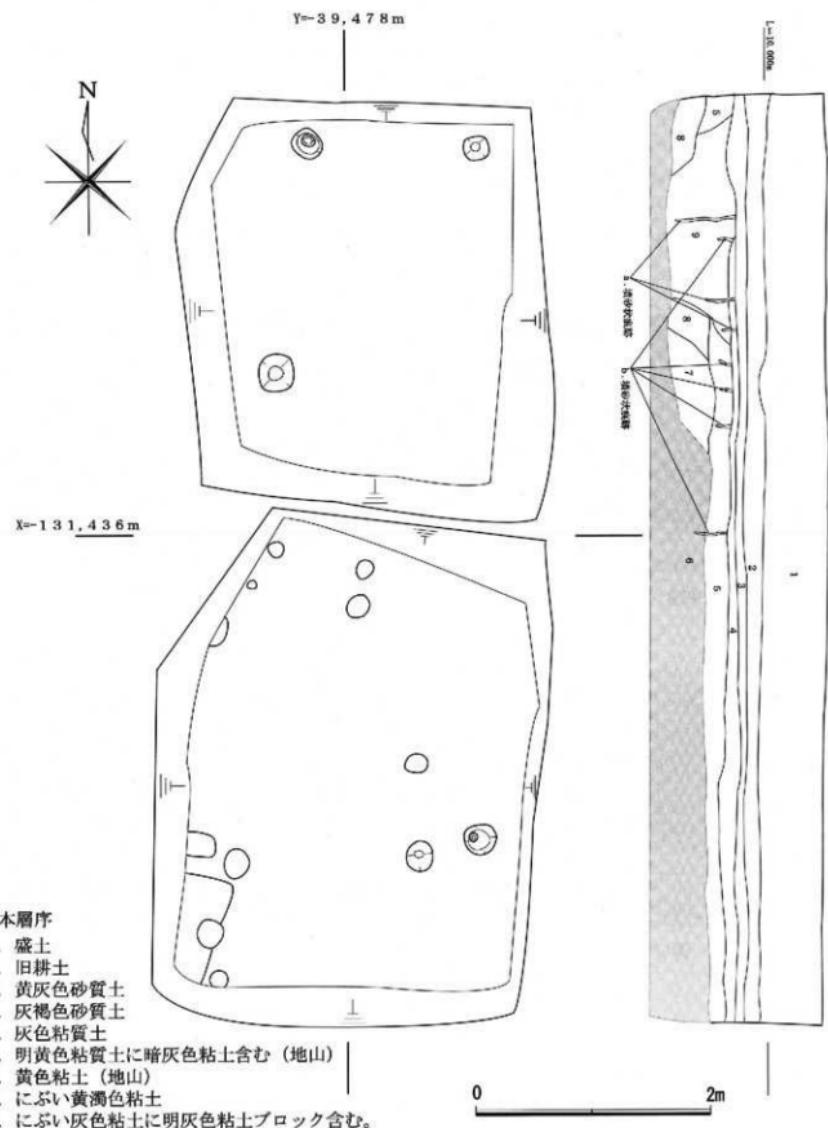
第37図 遺構完堀状況（北西から）



第38図 東壁土層断面



第39図 調査風景（北東から）



第40図 調査区平面・断面図

7. 茨木遺跡 (IK11-2)

所在地 茨木市元町1537-2・1538-3

開発事業 個人住宅建築工事

調査期間 平成23年7月8日

調査面積 約13.5m²

調査担当 富田 卓見

調査結果

位置と環境 茨木遺跡は、阪急電車茨木市駅北西側に所在し、上泉町・元町・本町・片桐町・宮元町・大手町にかけての東西約300m・南北約700mの範囲に広がる、弥生時代から中・近世の集落遺跡である。当遺跡は、中世の茨木城跡として知られており、現在でも近世の古い町並みが一部に残っている地域である。また、天正期に当遺跡内にあったとされる茨木城の主であり、柴田勝家との戦ヶ岳の戦(1583年)において戦死した戦国大名・中川瀬兵衛清秀の菩提寺「梅林寺」も、当遺跡内に所在する。

当地周辺は早い時期から市街化され、近年の再開発に伴う発掘調査で、遺跡の詳細が徐々に明らかになってきている。文献や地割り・字名から、当遺跡内に茨木城が存在していたことは既に判明しているが、当時の町構造や城・堀などの正確な配置はまだ判明していない。平成18年度に行なわれた調査では、城の堀と推定される南北方向に走る大溝を検出し、その埋土内から織豊期のものと思われる「おさ欄間」などの建具や、床板・化粧板などの部材を検出した。この部材が茨木城に直接関係するものであるかは不明であるが、保存状態も良く、当時の建築・内装状況を知るために一級の資料と言えよう。

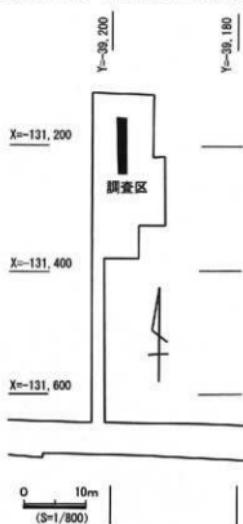
今回の調査地は、茨木遺跡南部で、「江戸文化年間摂州茨木図」「明治六年茨木村地租書上帳」記載の柴屋町にあたる地字のほぼ中央北端に所在する。この柴屋町の中心を東西に走る道の西方には、茨木神社が鎮座する。また今回の調査地は、茨木城の南堀推定ライン付近の南側に位置している。

調査の方法 今回の調査では、正確な位置が判明していない茨木城の南堀ラインを確定するため、南北方向に幅約1.8m×長さ約9.0mのトレンチを設定した。GL-約1.2mまで掘り下げ、第1面として精査、図面や写真などの記録保存作業を行った。また、調査区北側の一部を下層確認のためにさらに深く掘り下げを行ったが、砂層からの湧水で調査継続が困難となつたため、GL-約1.6m以下は確認できなかった。

基本層序 現地表面(GL)からGL-約0.6mまでは、近世～現代の整地層である。当調査地周辺は、古い町家が現存している



第41図 調査地位置図 (S=1/6000)

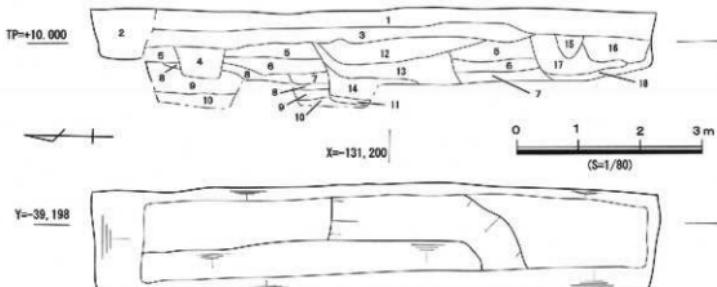


第42図 調査区配置図

地域であり、瓦などのゴミ廃棄のためと思われる上層からの大きな土坑が検出された。GL-約1.4m以下は、主に明黄褐色砂層である。当遺跡の西隣を流れる茨木川の洪水堆積層と思われ、当遺跡南西部一帯の各所で検出している。各層中から遺物はほとんど検出されなかったため、時期は不明である。

検出構造・出土遺物 調査区中央部にて、土坑を検出した。幅約2.0m・深さ約1.0mを測り、盛土直下面から掘り込まれている。埋土中からの出土遺物も新しい様相の陶磁器片や瓦片を検出したため、時期は古くとも近世頃のものと思われる。また土坑中層より、稲藁を含んだ焼土ブロックを多く検出した。検出面直上層であるにぶい黄褐色砂質土中からは、土師器小皿細片を検出した。口縁がての字形で、平安時代後期頃のものと思われるが、摩滅が著しく、混入遺物である可能性が高い。

まとめ 今回の調査で、茨木城の南堀ラインが確定できるのではないかと思われたが、平面状況・土層断面状況の様子からは、城堀らしき痕跡は見られなかった。今回のトレンチ以南は、柴屋町の中心へと向かうため、幅10mを超えると思われる城堀があったとは考えにくい。従って、当調査区の北端から、北東へ約50mに位置する梅光寺との間に、東西方向の堀が存在していた可能性が高いと推測される。今後の周辺での調査に期待したい。



- 1. 2.507/1(1段) 砂質土、ガラ・礫を多く含む。底土。
- 2. 2.573/(2) 黄褐色) 砂質土、ガラ・礫を多く含む。底面に土様状の痕跡あり。混乱。
- 3. 2.574/(1) 黄褐色) 砂質土、細繊維を少量含む。
- 4. 10YR4/1(4) 黄褐色) 砂質土、灰化色、ガラを多く含む。
- 5. 10YR5/2(5) 黄褐色) 砂質土、纖維を少量含む。
- 6. 10YR5/2(6) (にぶい黄褐色) 砂質土。
- 7. 10YR4/1(7) 黄褐色) 砂質土、細繊維を少量含む。
- 8. 10YR4/6(8) 黄褐色) 砂質土。
- 9. 10YR4/1(9) 黄褐色) 砂質土。
- 10. 10YR7/1(10) 黄褐色) 砂質土、ガラを多く含む。
- 11. 10YR6/1(11) 黄褐色) 砂質土、細繊維を含む。
- 12. 2.574/3(12) 黄褐色) 砂質土、ガラ・礫・焼土ブロックを少量含む。
- 13. 2.575/1(13) 黄褐色) 砂質土、ガラ・礫・燒土ブロックを少量含む。
- 14. 10YR5/1(14) 黄褐色) 砂質土、ガラ・礫を多く含む。
- 15. 10YR4/1(15) 黄褐色) 砂質土。
- 16. 10YR6/2(16) 黄褐色) 砂質土、ガラを多く含む。
- 17. 10YR6/4(17) (にぶい黄褐色) 砂質土、5のブロックを少量含む。
- 18. 10YR5/4(18) (にぶい黄褐色) 砂質土。

第43図 調査区平面・土層断面図



第44図 発掘状況（左：平面・南より、右：東壁・北西より）

8. 耳原遺跡 (MH11-1)

所在地 茨木市耳原一丁目277-10

調査原因 個人住宅建築工事

調査期間 平成23年7月25日

調査面積 8.1m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

経過 耳原遺跡は、縄文時代晚期頃から中世頃にかけて広がる複合集落遺跡である。遺跡の広がる範囲は、耳原一丁目から同三丁目、南耳原二丁目にかけて東西約350m×南北約300mが遺跡の包蔵地である。遺跡の包蔵面積は、約35万4千m²を占める。当遺跡は市内の中央部のほぼ東側にあたり、茨木川左岸及び、安威川の右岸の二河川に挟まれた舌状の丘陵上に位置する。既往の調査の一例として、昭和55年度の名神高速道路開通に伴う発掘調査が挙げられる。この調査で、縄文時代晚期（滋賀里式・船橋式・長原式）の壺や（深鉢）棺墓が16基検出され、また、石器が50点以上出土している。平成に入ってからは、同16年度の耳原遺跡の一次調査において、耳原三丁目地内にある耳原古墳と鼻摺古墳の中間地点に存在した丘陵地上で、6世紀後半頃から7世紀初期頃に築造したと考えられる「耳原西古墳」が新発見された。調査直前の環境としては、表土を除去する前には既に側壁と思われる花崗岩石の一部が目視できる状況であった。表土を除去すると天井石が後世に取り除かれており、2段目以上の側壁が石室内部に落ち込んでいる状況であった。なお、石室内部は既に盜掘された状況であ

り、内部の土を振るいにかけたところ、楕円形状の金製環1点とガラス小玉が約43点出土した。なお、金製環については観察したところひしゃげたような状況が見受けられる事から、本来は正円形だった可能性が考えられる。この耳原西古墳の発見で、耳原古墳・鼻摺古墳と東西に並ぶ古墳群の様相を示す事となった。

基本層序 現地表面は、標高約21.6mを測る。今回は建築物の設計上から、掘削可能深度が現地表面下より0.85mまでという制約のもとで調査を行なった。基本層序については、第1層、現代の盛土層である。層厚は、概ね約0.85mを測る。

まとめ 今回の調査では、掘削可能深度が現地表面下より0.85mまでという制約のもとで調査



第45図 調査位置図



第46図 調査区配置図

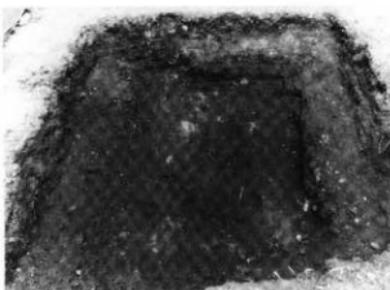
を行なった為、遺構が存在すると思われる層の確認ができなかった。今後の周辺での調査に委ねたい。

参考文献

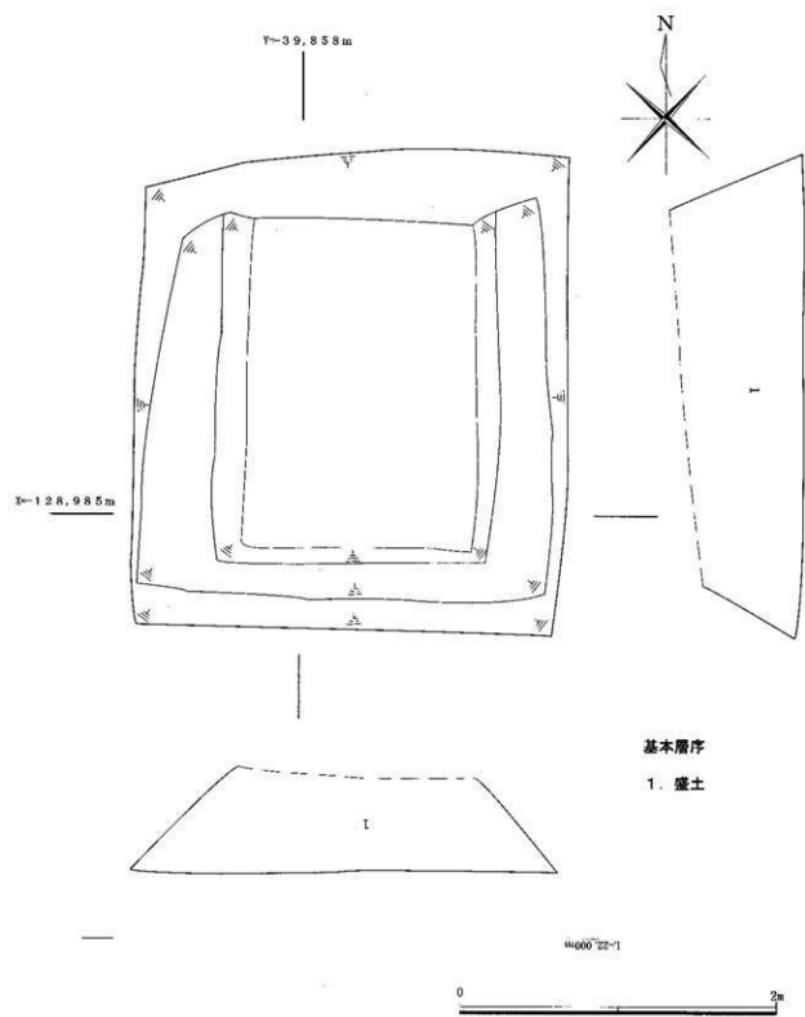
茨木市教育委員会『平成17年度発掘調査概報』平成17年3月



第47図 調査地全景（北から）



第48図 平面掘削状況（北から）



第49図 調査区平面・断面図

9. 茨木遺跡 (IK11-3)

所在地 茨木市片桐町1102-26

開発事業 個人住宅建設工事

調査期間 平成23年8月17日～18日

調査面積 21.7m²

調査担当 宮本 賢治

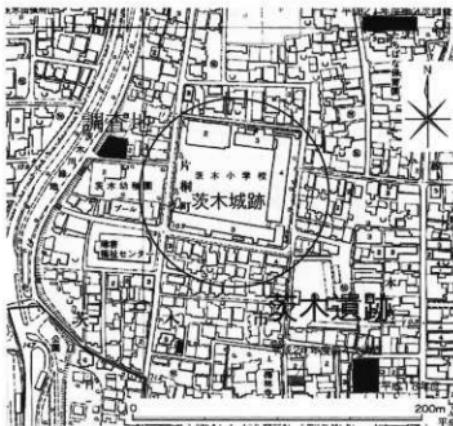
調査結果

経過 茨木遺跡は、上泉町・元町・本町・片桐町・宮元町・大手町にかけて広がる、弥生時代から中・近世にかけて営まれた集落跡である。遺跡の範囲は、東西約0.4km×南北約1kmの南北に長く広がっている。片桐町・本町・元町を中心には茨木城跡の範囲が推定されており、平成18年度の調査において城の濠と考えられる流路内より、築欄間

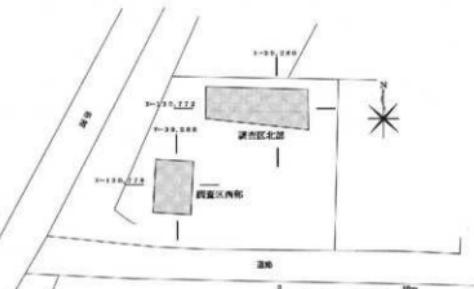
(2点)や造り戸(3枚)、明かり障子(1点)、化粧板、柱材(角、丸、板材)といった建具が保存の良い状態で出土している。これらの建具が出土したのは、織豊期から江戸時代初期の頃の生活面である。なお、この時の調査で17世紀末頃から18世紀代の生活面を中心とした面を第1遺構面、17世紀中頃から後葉頃の生活面を中心とした第2遺構面、16世紀後葉(織豊期)から17世紀前葉頃(江戸時代初期)頃の生活面を第3遺構面、古墳時代・鎌倉時代から室町時代の生活面を中心とした面を第4遺構面と時代毎に、その様相が明らかとなった。この時の調査は、茨木遺跡、特に茨木城を考古学的側面から考えていくうえで非常に高い成果を得る結果となり、周辺の調査を実施するうえで一つの指標となるべき物である。なお、先に述べた建具一式が出土したのは、第3遺構面からである。

基本層序 現地表面は、11.3mを測る。基本層序については、第1層～第11層に大別することができる。上層より順に、第1層層厚約0.6mを測る盛土層である。第2層は、層厚約0.15mを測る旧耕土である。第3層は、層厚約0.1mを測る旧耕土の床土である。第4層は、層厚約0.05m～0.15mを測る灰色粗砂を主体の土色で持つ層である。第5層は、層厚約0.1m～0.15mを測る暗灰色粗砂の土性を持つ層である。

第6層は、層厚約0.1mを測る緑灰色粘土の土性を持つ層である。第7層は、層厚約0.15m～0.2mを測る緑灰色粗砂の土性を持つ層である。なお、先に挙げた第5層上面から第7層の底面



第50図 調査位置図



第51図 調査区配置図

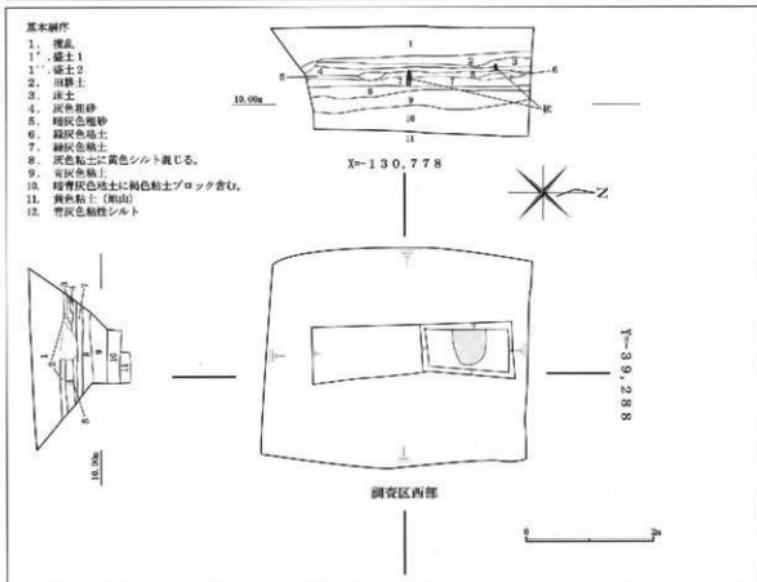
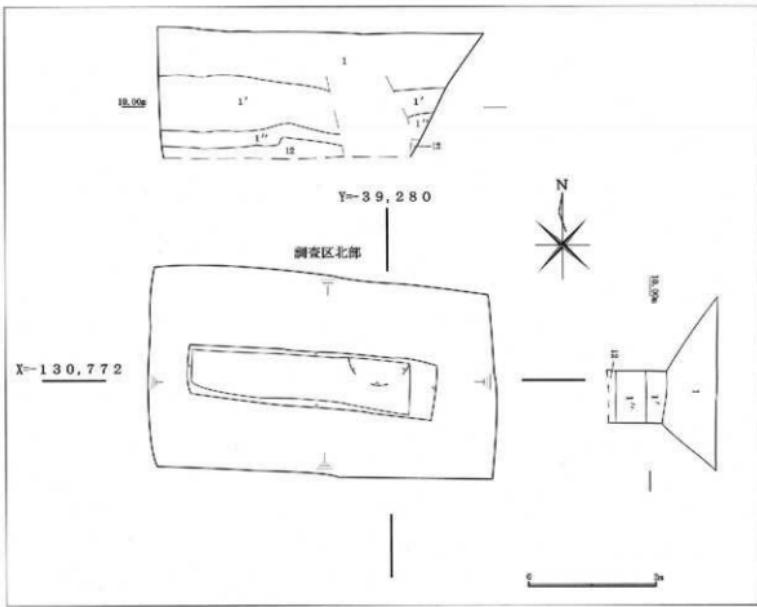
にかけて残存径約0.1mの杭が土層断面中にて確認された。掘削中に幾本もの杭や木片が見つかっていることから、洪水や元茨木川の氾濫に対する護岸用のものと思われる。第8層は、層厚約0.1m～0.25mを測る灰色粘土に黄色シルトが混じる土性を持つ層である。第9層は、層厚約0.2m～0.4mを測る青灰色粘土を土性を持つ層である。第10層は、層厚約0.3m～0.7mを測る暗青灰色粘土に褐色粘土ブロックを含むものを土性を持つ層である。第11層は、黄色粘土の土性を持つ地山層となる。

検出遺構・出土遺物 今回の調査では、調査区北部で標高約9.2mに整地層を確認し検出を試みたが、遺構の痕跡を現すものはなかった。調査区西部は、北部と層の堆積の様相が大きく異なり複雑化している。標高約9.9mにて北部で確認されたものと同面であると考えられる整地層を確認したが、ここでも遺構は検出できなかった。その下層の標高約9.5mの地山層で、土壤状の遺構を1基検出した。但し、時間的な制約から遺構掘削には至らなかった。出土した遺物は、遺物収納用コンテナバット（縦14cm×横36cm×奥行き56cm）に換算して1箱分である。その種類と内訳は、細片のため時期の詳細は分からぬが、内外両面黒色の特徴を持つ黑色土器B類の土器器片が出土している。この他には、面戸（めんど）瓦の特徴を持つ近世瓦なども出土している。これらの遺物は、いずれも調査区土層断面中においての出土である。

まとめ 今回の調査区は、敷地内で元茨木川の東岸に一番近い場所に設定した。その結果確認された土層断面中第5層、第7層、第8層、第9層は、層厚堆積の不規則さや、減衰特性（同じ層の層厚の希薄堆積から濃厚堆積への変化が顕著化していることなど）から、元茨木川の氾濫堆積層と考えられる。このことから、度重なる洪水によって、ある一定期間を除いて定住するには困難な状況が続いたことが伺える。茨木遺跡の調査は、近年専用住宅の建て替えに伴い、増加傾向にある。今後の周辺での、調査および成果に期待するものである。

参考文献

- 茨木市教育委員会「平成18年度発掘調査概報」平成18年3月
茨木市教育委員会「平成22年度発掘調査概報」平成23年3月



第52図 調査区平面・断面図



第53図 調査地全景（西から）



第54図 調査区北部全景（南東から）



第55図 調査区北部完掘状況（西から）



第56図 調査区西部全景（南から）



第57図 調査区西部完掘状況（北から）



第58図 調査風景（南西から）

10. 東奈良遺跡 (HN 11-1)

所在地 茨木市天王一丁目17-13

開発事業 個人住宅建築工事

調査期間 平成23年8月24日～26日

調査面積 約12m²

調査担当 富田 卓見

位置と環境 東奈良遺跡は、阪急電車南茨木駅北西付近を中心とした、東西約1km・南北約1.2kmの範囲に広がっており、弥生時代から中・近世にかけての複合遺跡である。当遺跡は、昭和45年から同47年に行われた小川水路改修工事で、重機掘削された土中より大量の遺物が確認されたことから、遺跡の存在が明らかとなった。

東奈良遺跡の名前が全国的に知られるようになった契機として、昭和48年から49年にかけて行われた調査にて、銅鐸・銅戈・勾玉の鋳型や、籠の羽口が出土したことが挙げられる。これにより、鋳物製作集落という性格が明らかとなった。また周辺での発掘調査が増えるに従い、弥生時代前期から中期にかけての集落の居住域を巡る大溝の存在が判明し、大規模な環濠集落であったことが明らかとなった。また集落は、時代を経るごとに環濠を外側へ広げていき、居住域を拡大していくことも判明している。今回の調査地周辺で近年に行われた調査では、平成19・20年度に当調査地の東約60mの地点にて行われた発掘調査で、1辺約12.5mの方墳1基・周溝心で径約20mの円墳1基が隣り合った状況で検出した。マウント部も含め、後世の土地造成で全面的に削平を受けていたが、周溝埋土中から検出した遺物より、古墳時代後期のものと推測される。

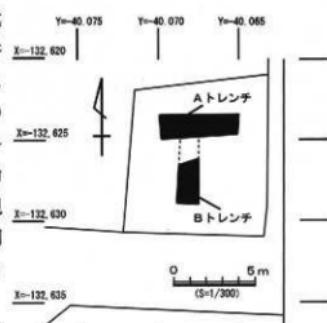
調査方法 調査地内の東西・南北方向にトレンチを設定し、最大GL-約2.2mまで掘り下げ、図面・写真等の記録保存作業を行った。

調査の結果 Bトレンチにて、GL-約2.0m地点で近代～現代の旧耕土層(N3/暗灰色粘質土)を確認した。旧耕土上面から現地表面までは、全て近現代の盛土である。調査地の東側約60mで行われた調査では、近代～現代の旧耕土上面がT.P.=+約9.0m、今回の調査ではT.P.=+約9.2mであった。調査地直南の道路レベルがT.P.=+約10.8mであることから、当地周辺の住宅地造成時に大規模な土地造成を行ったことがわかった。しかし今回の調査では、調査区狭小のため、旧耕土以下の層は確認できなかった。

まとめ 今回は調査区が狭小だったため、旧耕土以下の層の確認ができなかったが、平成19・20年度の調査と同様に、弥生時代・古墳時代の遺構・遺物が残存している

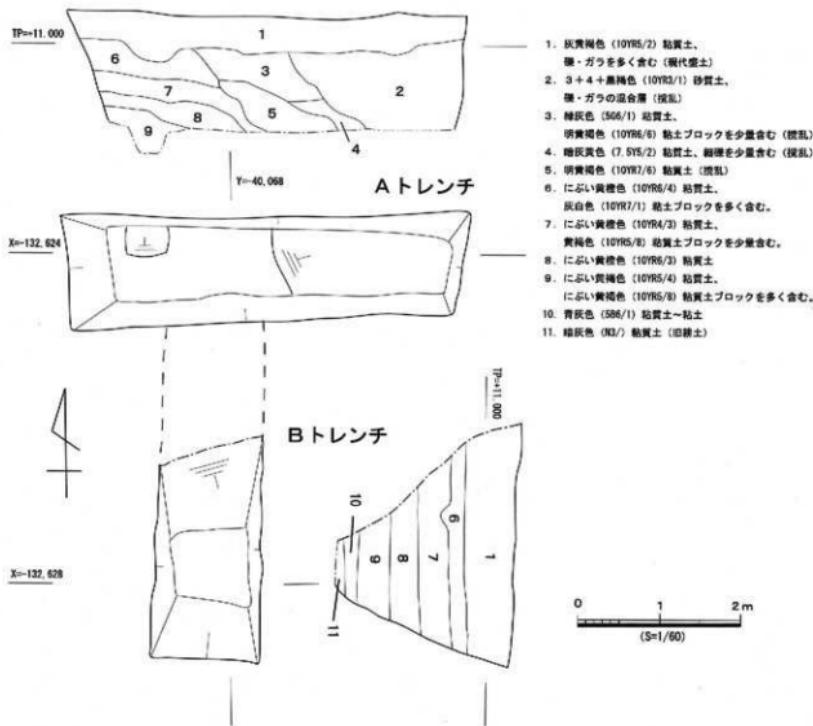


第59図 調査位置図 (S=1/7500)

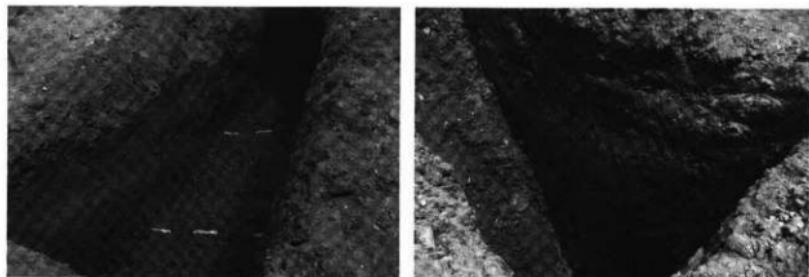


第60図 調査区配置図

可能性がある。東奈良遺跡のこれまでの発掘調査は、北～東部にかけての範囲に対し、南～西部での調査事例が少ない。今後の調査で、南～西部の様相も明らかになることを期待したい。



第61図 調査区平面・土層断面図



第62図 発掘状況

11. 茨木遺跡 (IK11-4)

所在地 茨木市別院町1355-2

開発事業 個人住宅建築事業

調査期間 平成23年9月8日～9日

調査面積 約12m²

調査担当 富田 卓見

位置と環境 茨木遺跡は、阪急電車茨木市駅北西側に所在し、上泉町・元町・本町・片桐町・宮元町・大手町にかけての東西約300m・南北約700mの範囲に広がる、弥生時代から中・近世の集落遺跡である。当遺跡は、中世の茨木城跡として知られており、現在でも近世の古い町並みが一部に残っている地域である。また、天正期に当遺跡内にあったとされる茨木城の主であり、柴田勝家との戦ヶ岳の戦(1583年)において戦死した戦国大名・中川漣兵衛清秀の菩提寺「梅林寺」も、当遺跡内に所在する。

当地周辺は早い時期から市街化され、近年の再開発に伴う発掘調査で、遺跡の詳細が徐々に明らかになってきている。文献や地割り・字名から、当遺跡内に茨木城が存在していたことは既に判明しているが、当時の町構造や城・堀などの正確な配置はまだ判明していない。今回の調査地から西へ約125mに位置し、平成18年度に行なわれた調査では、城の堀と推定される南北方向に走る大溝を検出し、その埋土内から織豊期のものと思われる「おさ欄間」などの建具や、床板・化粧板などの部材を検出した。この部材が茨木城に直接関係するものであるかは不明であるが、保存状態も良く、当時の建築・内装状況を知るために一級の資料と言えよう。

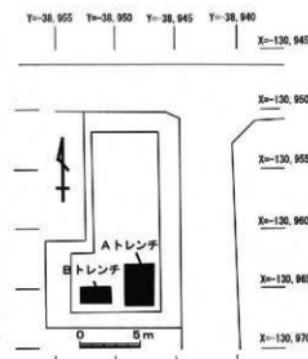
今回の調査地は、阪急茨木市駅の北西約275m、茨木遺跡内では南東部に位置する。「江戸文化年間摂州茨木図」「明治六年茨木村地租書上帳」記載の西外之町にあたる地字のほぼ中央にあたり、東隣の東外之町との間を南北に走る道の南方には、東本願寺茨木別院が所在する。

調査方法・土層状況 調査地内の南部に、約3.1m×約2.8m(Aトレンチ)、約1.4m×約2.5m(Bトレンチ)の各トレンチを設定し、G L-約1.1mの青灰色粘土～粘質土層上面まで掘り下げ、図面・写真等の記録保存作業を行った。土層状況は現地表面から順に、以前当地に建っていたビルの基礎盛土(にぶい黄色砂・灰色砂まじり粘質土)、緑灰色砂まじり粘質土で構成されている。このため、ビルの建設時に近世～現代の土層が大きく掘削されており、当該期の遺物は、少量の瓦片を除きほとんど検出しなかった。

検出遺構 今回の調査では、遺物包含層直下の遺構面



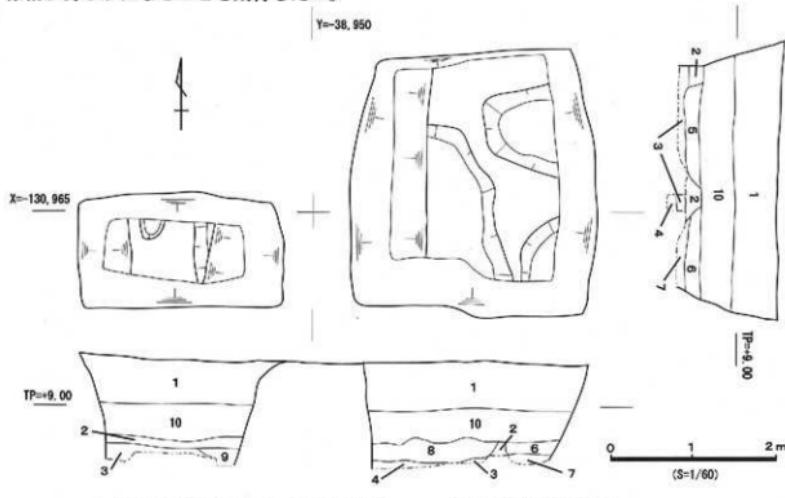
第63図 調査位置図 (S=1/7500)



第64図 調査区位置図 (S=1/400)

で南北にはしる溝（SD01）を検出した。溝の幅は約1.2m、深さ約0.5mをはかる。溝の埋土から土器などの遺物は出土しなかった。

調査の結果 今回の調査地周辺にて度々確認されている青灰色粘土～粘質土層の存在を確認した。この層中には植物遺体が残存しており、ある時期では湿地帯のような状況であったものと推測される。埋土が砂で構成されている遺構については、湿地帯のくぼみに砂が堆積したものと思われる。土器などの遺物を検出しなかったため時期は不明であるが、近世の町地図には町名がつき、人が生活している様子がうかがえることから、元々湿地帯だった場所を土地造成し、中世後半から近世頃に町を形成したものと推測される。今後の調査によって、茨木遺跡東部の様相が明らかになることを期待したい。



第65図 調査区平面・土層断面図



A トレンチ (西より)



B トレンチ (北より)

第66図 発掘状況

12. 安威城跡 (AIC 11-1)

所在地 茨木市安威二丁目480-6
開発事業 個人住宅建築工事
調査期間 平成23年10月19日～20日
調査面積 24m²
調査担当 宮本 賢治
調査結果

経過 安威城跡は、北摂山地を源流とする安威川が三島平野へ流れ込んで形成した河岸段丘上に立地する、土豪安威氏によって築かれたとされる中世の城砦(居館)である。その土豪安威氏について、は、1363(貞治二)年に著わされた「六波羅蜜寺文書」中の「御所近習連署奉加状」にその名が初見される事から、鎌倉時代後期頃には安威氏は在地領主として、この地を治めていたと考えられる。古くは、この地周辺においては縄文時代頃のものと考えられる石器や、同時期の後期から晩期の土器の散布がみられる事から、中世より以前にはこの地に人々が生活していた事が伺われる。安威城跡の包蔵地範囲は、東西約0.36km×南北約0.7kmの不整形ながらやや南北に長く広がっている。



第67図 調査区位置図

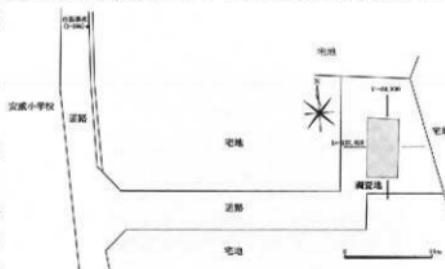
既往の調査では、本調査地の西へ約50mのところで安威公民館の建設に伴い、平成14年に発掘調査が行なわれている。調査の結果、近世の集落(安威村)に関連する柱穴や井戸、土壙遺構等が検出されている。また、平成22年度の調査では中世終わり頃から近世にかけての陶磁器や鉢、丸・平瓦が出土地している。なお、今回の調査地は安威城跡推定地の内郭地域に相当する。

今回の調査は、個人住宅新築に伴い発掘調査を実施するに至った。

基本層序 第1層～第3層に大別することができる。上層より順に、第1層現代の盛土層である。層厚は、概ね0.6m～1.1mを測る。第2層は、中世～近世頃の遺物を含んだ層となる。土性は暗褐色粘土SC10YR3/3を主体とするもので、層厚は概ね0.3mを測る。第3層は地山となり、土性は黄褐色砂礫S10YR5/6を主体とするものとなる。

検出遺構 現地表面は標高35.9mを測る今回の調査では、近世を中心とした生活面を検出した。検出された遺構としては、ピット状遺構15基、土壤状遺構5基である。

出土遺物 今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパックド(縦14cm×横36cm×奥行き56cm)に換算して1箱分である。その種類と内訳は、近世頃の丸・平瓦や陶磁器、鉢などである。なお、遺構面直上包含層中より、平安時代以降のものと思われる軒平瓦(中央の朱文の右半分から端面までの部分が残存)



第68図 調査区配置図

が出土している。

まとめ 今回の調査から、近世頃の集落跡の一端が少ないながらも判明した。なお、この地は古来、中臣藍連の居住地に比定されており、その後は摂閥領→興福寺関係の所領となっていた事から、藤原氏と縁の深い地域である。古代から中世頃の生活面は近世以降の整地により、そのほとんどが削平されたものと考えられる。今回の調査地は第69図を参考にすると、外郭北側の「大手口」に隣接している。平素は安威山麓の内郭に構えた居館に起居し、戦乱期となりいざ形勢が不利となれば、背後の安威の山にある防御拠点であった「安威砦」へ移り、戦闘指揮を執ったのであろう。

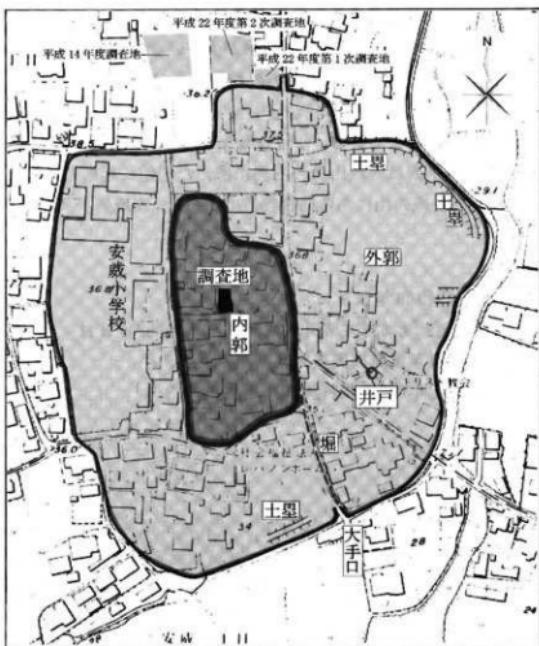
参考文献

茨木市役所『茨木市史』昭和44年3月

茨木市・茨木市教育委員会『わがまち茨木- 城郭編 -』昭和62年3月

茨木市教育委員会『平成14年度発掘調査概報』平成14年3月

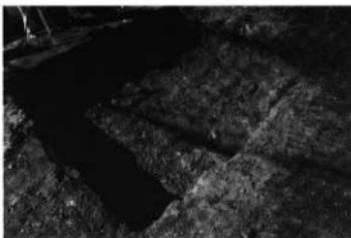
茨木市教育委員会『平成22年度発掘調査概報』平成23年3月



第69図 安威城跡推定位置図



第70図 調査地全景(南から)



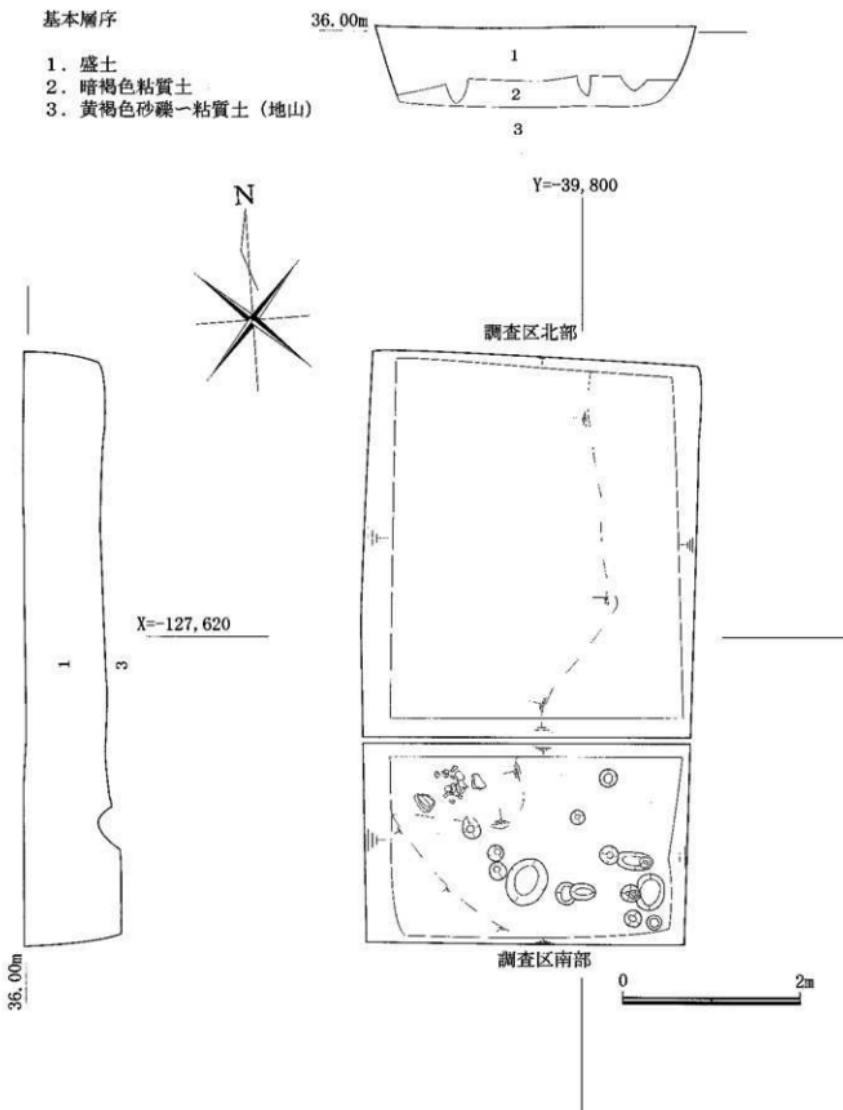
第71図 調査区北部地山面完掘状況（南東から）



第72図 調査区南部邊構面(地山)完掘状況(南から)



第73図 調査風景（南東から）



第74図 造構平面図、調査区北・西壁土層断面図

13. 郡遺跡 (KH11-2)

所在地 茨木市上穂積二丁目584-2

開発事業 個人住宅建築工事

調査期間 平成23年11月24日(木)～25日(金)

調査面積 約50m²

調査担当 関 梓

調査結果

位置と環境 郡遺跡は、茨木市の西北部、千里丘陵から千里丘陵から派生した丘陵部に位置する、南北に1.2km、東西に0.7kmに範囲を有する弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。郡遺跡は、本調査地から北に700mほどのところに位置する名神高速道路のインターチェンジ建設工事に伴う工事で数多くの弥生土器や須恵器が出土したことから、この地域に広範囲に遺跡が広がることが確認された。

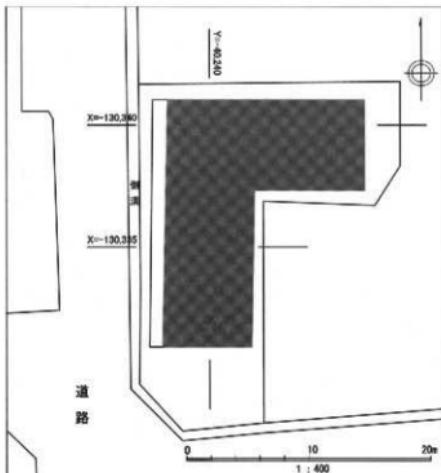


第75図 調査地位置図

また、郡遺跡では比較的大規模な発掘調査が行われており、高速道路インターチェンジの南に位置する住宅開発に伴う調査(1973年)では、弥生時代中期から後期にかけての方形周溝墓や竪穴住居跡・井戸・溝といった遺構が検出され、古墳時代の古墳や馬の墓などが数多く見つかっている。それ以外の調査においても郡遺跡では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構や遺物が数多く確認されている。今回の調査地は、郡遺跡のなかでも南側に位置する。

今回の調査は、個人住宅建築に伴い埋蔵文化財の発掘調査を行った。調査区は、建設予定地の西側に道路に対して平行に水道管が布設されているため、西側部分については約1mの幅を残すかたちで、南北約10m、東西約8mのL字形状に設定した。調査は2日間でおこない、土置き場の都合から反転調査で1日目に北側部分を、2日目に南側部分の調査をおこなった。

基本層序 現地表面は、標高約17.5mをはかる。現地表面(G.L.)から約-0.4mで地山を確認した。北壁土層断面では、上から第1層が現代盛土、層厚約0.2mをはかる。第2層は、旧耕土層であり、北側土層断面の一部において確認できた。層厚は約0.1mである。第3層として地山面(10YR5/6黄褐色粘質土)を検出した。調



第76図 調査区配置図

査区の南側にいくほど削平されている範囲が大きく東側土層断面においては、地山面上層の層序はすべてが盛土によって構成されていた。

また、今回の調査では郡遺跡において顕著にみられる暗褐色を呈する遺物包含層は確認することはできなかった。これらのことから、当調査地は後世の開発により大きく削平されていることが確認された。

検出遺構 今回の調査では、南北に走る溝 (SD01・SD03) とそれらの溝をきる形で東西に走る溝 (SD02)、柱穴状遺構 (SP01~SP8) を複数基礎確認した。

特に、SP01からは中世の土師皿の破片とともに炭化物などがまとまって出土している。他の遺構についても埋土内からは、中世の土師器片や瓦器片が出土しており、遺構の大半は中世の範囲に属するものであると考えられる。ただ、出土遺物はほとんどが細片であり、それ以上の時期を特定するには至らなかった。

出土遺物 出土遺物としては、ピット (SP01・SP06・SP07) から土師器片などが出土している。特にSP01からは土師皿や瓦器碗の破片が炭化物を伴ったかたちでまとまって出土している。他にも溝 (SD02・SD03) から土師器片が数点出土している。また、土壙 (SK01) からは土師器片とともに瓦片が出土している。

出土遺物の大半は、土師皿や瓦器碗の破片であり、時期は中世の範囲に属するものであるが、いずれの破片も細片であり詳細な時期を特定するには至らなかった。また、今回出土した土器は細片であり図化に耐えうるものではなかった。

まとめ 今回の調査においては、中世の遺構と想定される溝、ピット、土壙などを検出した。これらの遺構は全体的に浅いものが多かった。それとともに、郡遺跡において普遍的に広がっている暗褐色を呈する遺物包含層が確認されず、盛土を除去するとすぐに地山と想定される層を検出したことなどから、今回の調査地は全面的に後世の削平を大きく受けているとみられる。

このため、本調査地の北側に位置し、昭和48年に茨木市立西幼稚園建設に伴う発掘調査では検出された時代中期の方形周溝墓や土壙墓が検出されているが、今回の調査地では時代がもっとくだる中世の遺構しか確認することができなかつたものと考える。

また、本調査地から東へ約600mに位置する茨木市立中央図書館の建設に伴う発掘調査においても、中世の遺構が数多く確認されていることから、郡遺跡においては中世においてもこの地域における拠点となる集落であったと考えられる。

本調査地の郡遺跡における位置づけは、近隣の調査成果の増加を待たなければならないが、今回の調査成果が中世の郡遺跡、しいては茨木を考えるうえでの一助となればと考える。

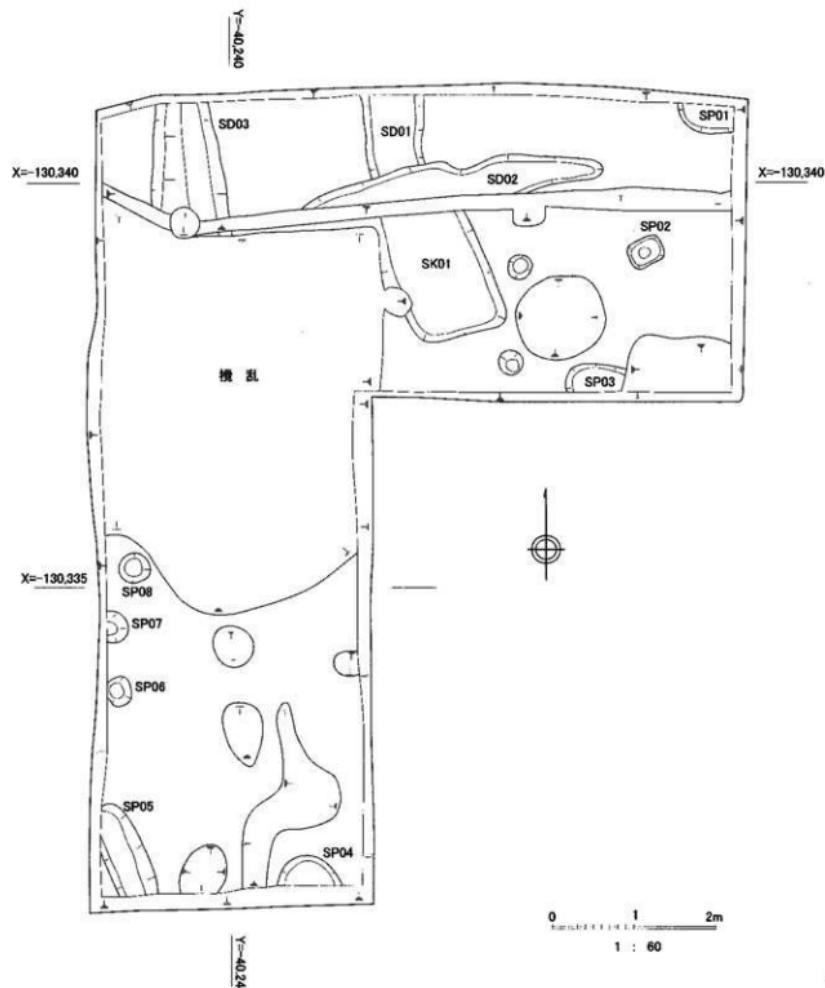


第1調査区 完堀状況(東から)



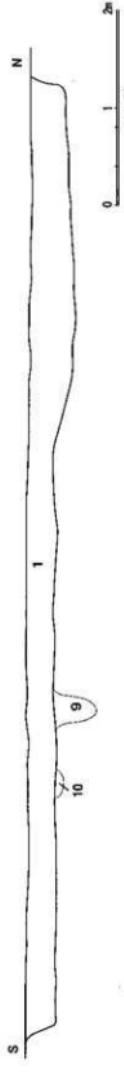
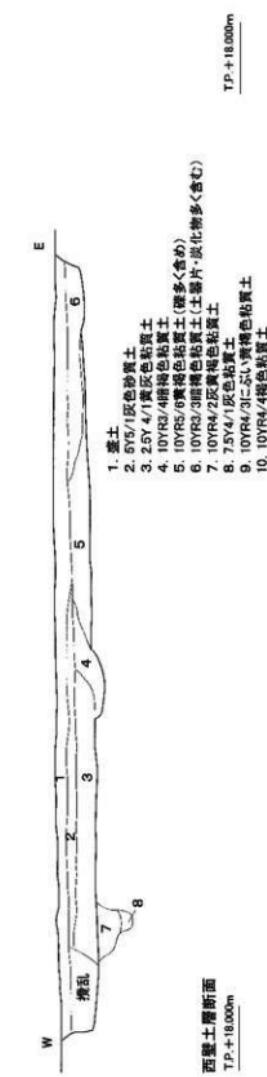
第2調査区 完堀状況(北から)

第77図 発掘調査風景



第78圖 調查區平面圖

邊坡斷面圖



第79圖 斷面圖

14. 倍賀遺跡 (IK11-2)

所在地 茨木市西田中町275-4・5

開発事業 個人住宅建築工事

調査期間 平成23年12月9日

調査面積 約6nf

調査担当 富田 卓見

調査結果

位置と環境 倍賀遺跡は、茨木市中央部の西田中町・春日4丁目・5丁目にかけて広がる、弥生時代中期から中世の複合遺跡である。遺跡範囲は、東西約710m・南北約550mを測る。今回の調査地は、倍賀遺跡の遺跡包蔵地内東端に所在し、阪急茨木市駅から北西へ約1.2kmに位置する。北～西隣には郡衙跡と推定されている郡遺跡、南西隣に春日遺跡があり、当遺跡を含めたこれらの遺跡は、弥生時代中期頃に南方に位置する東奈良遺跡からの分村と考えられている。今回の調査地周辺で行われた過去の発掘調査では、平成3年度に行われた調査で、弥生時代中期の土器廐棄土坑や方形周溝墓群、銅鐸土製品が出土した弥生時代中期～後期の大溝などを検出した。平成15年度に行われた調査では、多くの土器片とともに弥生時代中期の土坑や溝などを検出した。方形周溝墓は、隣接する郡遺跡のものも合わせると総数80基以上が検出されており、隣接する遺跡を含めた当地一帯が墓域であった可能性が高い。

調査方法・土層状況 建物建築範囲内に約2.6m×約2.3mの調査区を設定した。しかし今回の調査地は狭小で、遺構面も深かったことから、安全面を考慮し調査した結果、GL-2.2mの地点での検出面は約0.48m²となった。まずGL-約1.0mまで重機掘削を行い、続いて無遺物層・遺物包含層を掘削、GL-2.2m地点で精査し、図面・写真等の記録保存作業を実施した。北壁土層断面観察の結果、GL-約1.0mまでが盛土で、その下に灰白色砂質土(旧耕土)、にぶい黄橙色土(無遺物層)、青灰色粘質土層(古代～中世遺物包含層)、黒褐色粘質土～粘土層(弥生時代遺物包含層)、黒褐色砂まじり粘質土層と続く。

調査の結果 古代～中世の遺物包含層、弥生時代中期～後期の遺物包含層・遺構埋土と推定される土層を確認した。古代～中世の包含層からは、須恵器片と瓦器碗片を、弥生時代中期～後期の包含層からは、壺の底部片や高杯片などを検出した。当地近隣の土層データでは、弥生時代の遺物包含層直下に黄色系の地



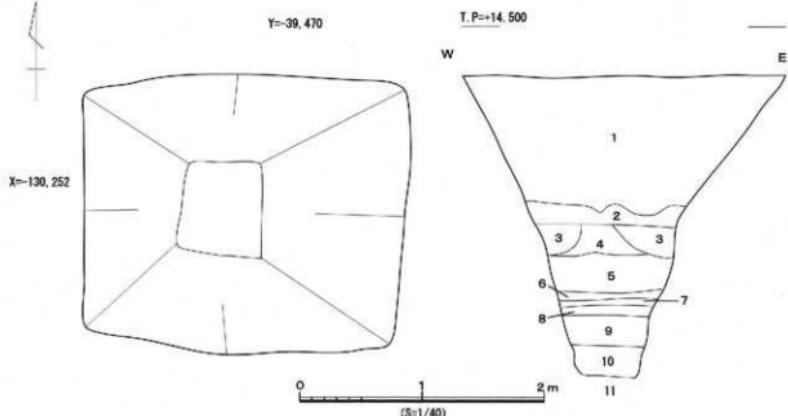
第80図 調査地位置図(S=1/13000)



第81図 調査区配置図

山層が確認されているが、今回の調査区では黒褐色土が続いていることから、土層断面図の下2層は流路等の遺構埋土と思われる。しかし、調査区が狭小であったため、遺構の詳細は不明である。

まとめ 今回の調査で、遺跡包蔵地東端に位置している当地周辺でも、弥生時代中期～後期の遺物包含層や遺構が良好な状態で残存していることを確認した。当地一帯は住宅地化の際に旧耕土上に盛土造成を行っているが、それ以前の旧耕土以下の層は、長期にわたって大規模な土地造成は行われなかったものと思われる。今後周辺にて行われるであろう発掘調査の成果に期待したい。

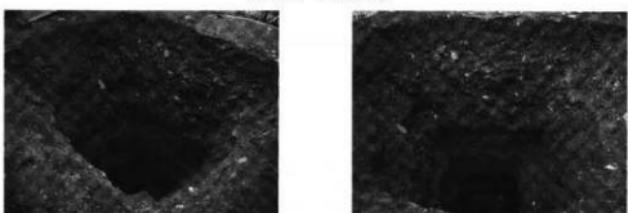


1. 黄土
2. 灰白色 (N4/1) 砂質土。印緑土。
3. 青灰土 (10B6/1) 砂まじり粘質土。新しい時期の水路？
4. にふい青灰色 (10Y8/4) 砂質土
5. にふい青灰色 (10Y8/4) 砂質土
6. 青灰土 (10B6/1) 砂質土。細砂を多く含む。細礫を少量含む。(古代～中世の包含層)
7. 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質土。細礫を少量含む。土器片を多く含む(弥生時代中～後期の包含層)
8. 黒褐色 (10Y8/1) 砂質土～粘土。土器片を多く含む(弥生時代中～後期の包含層)
9. 黑褐色 (10Y8/2) 砂まじり粘土～粘質土。細礫を少量含む(遺構埋土?)
10. 黑褐色 (2.5Y3/1) 砂まじり粘土。細礫を多く含む
11. 細オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂性シルト(遺構埋土?)

第82図 調査区平面・断面図



第83図 出土遺物



第84図 発掘状況

報告書抄録

書名	おおきかあいばらきへいせいにじゅうさんねんどはくつちょうさがねはう - こじんじゅうたけんらくにともなうはくつちょうさがねはうく - 大阪府茨木市平成23年度実態調査概要 - 個人住宅事業に伴う無形調査報告 -						
副書名	平成23年度 (2011年度)						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ名							
著者名	中東正之・宮本智治・関津・富山卓見						
編集機関	茨木市教育委員会						
所在地	667-8605 大阪府茨木市槇三丁目8番13号						
施行年月日	西暦2012年3月31日						
所収遺跡名	所在地	古町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
郡 上鶴橋二丁目43-11	27211	35	34°49'32"	135°33'33"	20110203	13.5 m ²	
總持寺 二角丘一丁目179-2	27211	32	34°49'54"	135°34'39"	20110325	8.0 m ²	
上中条 上中条二丁目35-5	27211	56	34°49'16"	135°34'09"	20110427	21.7 m ²	
茨木 片桐町1121-9	27211	104	34°49'15"	135°34'16"	20110602 ~ 20110603	13.0 m ²	
中条小学校 西中条町132-8	27211	52	34°48'46"	135°33'52"	20110615 ~ 20110616	13.5 m ²	
中条小学校 東中条町411-13	27211	52	34°48'52"	135°34'06"	20110705 ~ 20110706	28.0 m ²	
茨木 元町1537-2, 1538-3	27211	104	34°49'05"	135°34'17"	20110708	13.5 m ²	
耳原 耳原一丁目277-10	27211	31	34°50'12"	135°35'51"	20110726	8.1 m ²	
茨木 片桐町1102-26	27211	104	34°49'14"	135°34'14"	20110817 ~ 20110818	21.7 m ²	
東奈良 天王一丁目17-13	27211	55	34°48'13"	135°33'43"	20110824 ~ 20110825	12.1 m ²	
茨木 別院町1355-2	27211	104	34°49'08"	135°34'27"	20110908 ~ 20110909	12.0 m ²	
安威城跡 安威二丁目480-6	27211	65	34°50'56"	135°33'53"	20111019 ~ 20111020	23.8 m ²	
郡 上鶴橋二丁目584-2	27211	35	34°49'27"	135°33'36"	20111124 ~ 20111125	50.0 m ²	
信賀 西田町275-4, 275-5	27211	47	34°49'30"	135°34'07"	20111209	6.0 m ²	
所収遺跡名	種別	土壌時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
郡 集落跡	古墳時代			土師器・須恵器			
總持寺 集落跡				十輪器	遺物剖面図を複数点示すが、調査範囲では既に発達せず。		
上中条 集落跡	古墳時代～平安時代	住穴・溝・土壙・ピット	土師器・須恵器				
茨木 集落跡	近世	耕作痕・落ち込み・ピット	陶磁器・瓦				
中条小学校 集落跡	弥生	溝・ピット	弥生土器・土師器		土師器片は整理していたため、時間の経過であります。		
中条小学校 集落跡		住穴・溝・土壙	土師器・須恵器・古鏡		土師器片は整理していたため、時間の経過であります。		
茨木 集落跡	近世		陶磁器・瓦片		調査結果が出土内のため、追加・追削は行なっていません。		
耳原 集落跡					調査結果が出土内のため、追加・追削は行なっていません。		
茨木 集落跡	平安～近世	柱穴・溝・土壙・ピット	土師器・須恵器・陶磁器		遺物は多く出土より出土。		
東奈良 集落跡					起立柱跡により、平安以降の土壙が認められている。遺物は既に出土しておりません。		
茨木 集落跡					中条から近世の遺物が出土しているが、遺物内からも出土せず。		
安威城跡 城館跡		集石遺構・土壙・ピット	須恵器・陶磁器・軒平瓦				
郡 集落跡	中世	井戸・土壙・ピット	土師器・瓦器		遺物の大きさが削除をうけていた。		
信賀 集落跡	弥生時代		弥生土器・土師器・須恵器		遺物剖面図を複数点示すが、調査範囲では既に発達せず。		

平成 23 年度発掘調査概報
— 個人住宅建築に伴う発掘調査報告 —

発行日 平成 24 年 3 月 31 日

発 行 茨木市教育委員会

印刷所 株式会社トゥユー

